青鞜

十一月號

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十一月一日發行 第一巻第三號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十一月一日

第一巻　第三號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第三號内容

風邪（詩）……一……與謝野晶子
夢占ひ（振事劇）……七……長谷川時雨
安心（小說）……一二……水野仙子
枯草（短歌）……二七……茅野雅子
道子（小說）……三三……荒木郁子
言葉の力（飜譯）……三八……ホ　オ
菊日和（俳句）……四三……白雨
初秋（小說）……四七……上田君子
眼玉（小品）……五六……白雨
夕祭禮（小品）……六二……松本正生
夜明の灯（短歌）……六六……原田琴子
夕化粧（小說）……七三……木内錠子
高原の秋、……八八……らいてう
編輯後の雜感……一〇四……らいてう
社員諸姉へ（社員は必ず御一讀下さい。）編輯係
表紙繪……長沼智惠子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

風邪

與謝野晶子

十月八日の夜の十二時すぎ、
三人の男女の客を歸したあと、
語り疲れて床に入つたが、寢つかれぬ。

いつも點けて置く瓦斯の火を起きて消せば、
部屋中の魔性の「闇」ははたと音をひそめ、
みるみる大きく成つて行く黒猫の柔かな手觸りて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わたしの友染の搔卷の上を輕く壓へ、
また、涙に濡れた大きな黒目がちの
人を引く目の優形(やさがた)の二十三四の女と變つて
片隅に白い右の手を頤(あご)にしたまま寄りかかり、
天井の同じ方ばかり待ち人のあるよな氣分で見上げる。
(それはわたしの影である。)

部屋中の靜かなことは石炭の庫(くら)の如く、
何處からとなく障子の破れを通す霜夜の風は
長い吹矢の管(くだ)をわたしの髮にそおつとさし向ける。

わたしはますます寢つかれぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

閉ぢても、閉てても目は圓く開き、
横向に一人じつとして身ゆるぎもせぬ體（からだ）は
慄毛（おぞけ）だつ寒さと汗に蒸される熱さとの中で烹られる。

わたしは風邪を引いたらしい。
それとも何かに生血（いきち）を吸はして寢てるのか。
時計は二時を打つ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢占ひ

長谷川時雨

晩秋の野末の路の、すがれたる叢にもう虫の音もない。驛路の鈴の音にて幕があく。此處へ出てくるものは、つんぼの夢占ひの媼さんと、酔どれの奴と、阿呆の郡司の子息と、旅の二人連の男の五人だけである。幕があいた時に、夢占ひの媼さんは路のまんなかに座して、片手に煙草につける火繩をもち、片手に御幣のようなものをもつてゐる。ずつとそれより左の方に、枯草を敷いて奴が寝てゐる。その酔どれの背へ、秋の入日がうつすりとさしてゐる。

（媼のいふだけのことは、下座の祭文節がかはつて語る）

唄祭文「ええこれは夢うら判だんする商業（しようばい）。よい夢ならよい占をたて、悪い夢なら獏にくはせる考へつけましよ。迷ひこよ迷ひこよといふたら巫（かんなぎ）いちこを思はしやろ。此處ぢや夢うら、吉凶判だん頼まれまをそ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

酔どれの奴、むくむくと起上りて、目をこすりながら媼を見すえる。

奴白「あはははは、いつの間にか媼様が、夢うら判だんの店をおつぴらいたわ。

「てもさても、地から生へたか、どこからひよつこり出かけてきたか、どろりとろり、とろとろと、油のような酒に酔て

投ぶし「すがれた茅が世の屏風、君を抱寐の肘まくら。

「ええい。どつくりと共寐をした夢を見た。ああ、ああ、ああ。欠伸が出るほど寐てくれた。そこへお媼がひよいと出て、夢うら判だんか。へゝや、お手の筋。

「おなじ化るのなら、美しいのになつてござれ。お媼ぢやどつこいやつこらさ。

奴白「やつとこととつちやうんとこな。

「寐むりこけたる髭男、八里八方、四里四方、野分けのような大鼾。

奴はまた、徳久利を抱いて倒れ伏す、

唄祭もん「これは夢うら判だんするものよ。よい夢ならよい占をたて、悪い夢なら獏にくはせる考へつけましよよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奴は不意に起上り、夢に迷ふてをかしき身振りをはじめる。

奴『これこれこれ、まあまたしやれ、何處さお出なさる。いや、女郎樣の御腹立至極御尤なれど、この奴め、ちくとんべえ酒によふて、お賴まれのものつい調へかねた此頃には仰せられたこと、美事叶へまをさう。小判十枚、へへ、いと安い事。よし、よし。紫鹿の子の裙つけた、白地摺箔の小袖一枚、うんうん、それもよし、それもよし。其次は、何ぢやと、水のたるやうな鼈甲の櫛笄か、をつとずんとよし。奴は粹ぢや、萬端美事なのを見立て進上せう。ぬし樣はその小袖を着て、笄さして、びらりしやらり、びらしやら、びらしやら。をゝはづかし、おほほ、ええも、憎らしい。

『ささ、ござんせ〳〵この粹もののめ。

またころりと奴は倒れ伏す。

唄祭らん『迷ふ夢ならゆく道つけましよ。文の夢なりや物ごと長びくものよ。夢に粹ならさめてが不粹、夢は逆夢とかくおのれの得手勝手、吉凶判だんほどよくしましよ。

奴「はくしよ。そねめ不粋め、とかく水をばさしたがる。こちの間にや、浮氣な風は吹(ふき)はせぬ。

奴夢中にて身を起し、また眠りこける。

（次の唄の二節は、異りたる方面にて双方一所に唄ひ出す）

唄祭もん「迷ふ夢ならゆく道つけましよ。文の夢見りや物事長びくものよ。夢に粋ならさめてが不粋。夢は逆夢とかくおのれは得手勝手、吉凶判だんほどよくしましよ。

「野邊はたそがれやや寒の、西風たてば薄の穗花飛散つて、今宵は霜か、村雨は、野路の旅には封じもの。空に殘んの夕照(ゆうやけ)を、振かへり見るさんど笠。

唄につれて旅人二人來かかる。夢占の媼は、座つてゐるままにて火繩を旅人に突(つき)つける。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

唄祭もん「これは夢うら判だんする商業(しやうばい)。よんべのお宿の夢うらつけましよよ。

旅人白「はて、昨夜の夢占ならいらぬこと。

「今宵とまりのよい恵方、右か左か、左か右か、宿の姐(あね)へが両方いちどに袖をひく。

旅人白「その判だん願みましよ。

旅人白「あはははは。夢うら判だんの媼様(ばさま)はつんぼか。

「こりやまたどうした事であろ。

旅人白「さあ急ぎましよ、急ぎましよ。

「見かへりもせぬ夕鳥。

旅人はさつさといつてしまふ。異なる道よりところの郡司の子息、阿呆なる様にて とぼとぼと来かかる。

「あほうあほうと唄はれても、さてひよんなもの、昨夜の夢にたしかに逢ふた。ありや前の世から定まつた、いとしの妻ぢや、我妻ぢや。

白「夢にあふた。女子(をなご)やい夢に逢ふた女子(をなご)――やい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あいと返事もしをらぬか。ええ何故消えた、なぜうせた。つれなの人や戀しやな。

唄祭もん『夢なら判だん頼まれませう。

白『や、何といやる、そちや夢うら判だんか。

『嬉しや嬉しや、まづ言はふなら、昨夜見た此方の花嫁御は何處の誰ぢや、まづそれからきかう。それからとしは幾才ぢや、十七八か、いいや十九か。

白『ええ二十歳になぞはまだならぬのぢやわえ。

『みる目よし姿よし、大々吉吉、上上吉。婚禮萬端の日どりも便次に見てたもれ。

白『へへへへへ、よい嫁御ぢやよ。

唄祭もん『惡い夢なら獏にくはしよ。夢は逆夢、とかくおのれの得手勝手。

白『うう、おのれ。

唄祭もん『迷ふ夢ならゆく道つけましよ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白「そりやほんにか、これほんにか、ほんにか。

叔は夕風に吹かれ、惡酔やゝさめて、先刻から二人の様を眺めてゐるが、つい出しやばつて、

「これさ、これさお若衆、雛様はつんぼで馬の耳に念佛、おれさまに強意見と同じ道理で、駄目さ、駄目さ、仕方ばなしに頼まれまそそ。

「さらばかうぢやよ、ちよとこちへござれ、よんべ夜中に髮美しき上臈が、

白、ぴつたり傍へよりそふて

「やいの、やいの、どうでも君に離りやせぬ。

白、と、いふた。

叔「味なはなしに實がいつて。ふふふふふ、そりや夢かいの、しん實か。

白「いいや夢ぢや。

「夢ぢやからとて、離れぬといふたを反故にして、ゆくとはあんまり、つ、つ、つ、つれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない……、忘れかねたる面影、それ、それ、それそれをを、そこにゐておぢや。

奴に縋りついて泣落す、奴も女を氣どるをかしみ、媼はけげんな顔に二人を眺めて。

媼白「奴どのは狐つき、こつちの和郎は狂人か、

「はて面妖な、眉毛につばして、どりや歸りましよ。

奴「やれまてどつこい、どつこいしよ。おんら一人で物にするのは和母へ笑止。な、なな、ものにおしやれさ、な。

種々な身振にて媼へ納得させる。媼はやつと得心ゆきて物々しくかまへる。

媼「自體(じたい)そさまは何者おぢや。

阿呆「郡司の和子と人はいふ。

奴「よ、よ、よ。そんならたんまりやられるわ、

奴白「小判といふものもたしやるか、

阿呆白「これここにたんとある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奴「おつとよしよし、媼様に一枚、も一枚はづんでくれべえか。ところて奴が、ひいふう、五ッの十。山吹色はかはゆい酒を思はせる。

奴「嫁御は今宵おじやらりよう。御名は、むにやむにや、夢姫かだしかにお媼さうぢやげな。

阿呆白「さうぢや、さうぢや。

媼もよい加減に傾いてゐる。阿呆も嬉しさうに傾づく。

奴「しめ、しめ、しめ、しめ、しめこのうさぎ。月の出ぬ間に、どりや一さんにずいとく寺。

媼「わしも今宵は五勺(こゝから)貝はう、奴どのござれさ。

奴「お媼もおじやれ。

阿呆「わしもしめ、しめ、しめ子のうさぎ。姫と逢ふには何處がよい。

奴「露をしつぽり褒まつてござれ、待間ほどなく忍んでござる。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

阿呆は草の上に匍匐ひになつて、手拍子足拍子をとる。

奴「ねむりやほどなくそこらへござろ、一夜しつぽり草枕。朝のお顔がちよと見たい。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

奴「しめ、しめ、しめ、しめ、しめこのうさぎ、月の出ぬうちどりやずいとく寺。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

奴と姐は、手振をかしく踊りながら遠ざかる。阿呆は一人興じゐる。——幕。——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

安心

水野仙子

「おい！」

石鹸玉のやうにふはりと輕く出た言葉が、ふと譯もない輕い心持ちにしてしまつて、いきなり彼は同僚の肩に手をかけて、口を歪めて笑つた。

「なアおい！」

其時また〳〵勢ひに乘じた心持ちが、卷舌の生醉狀態の面白さを思ひ出して、どうやら足許も亂してみたくなつた。けれども白面なのは確かであつた。二人は今仕事からの歸りである。彼はまだ晝間の汗を入れがてに、白い襯衣を見せて半纏を肩にかけて居る。旗掛けの黑十文字が背中に橫に組んで、頸窩の深く長いのが、後から見た彼の特徴であつた。

折からくう――と一つ向ふの線路に電線が呻る。大蝗の肢を逆さまにしたやうなポールが、しゆうと辷つて電車は遙かの家並の陰に現はれた、と思ふうちにまた家並の陰に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつた。近頃めつきり色を増した青葉の中から、踏切りの白い柵がつと揚るのが遙かに見えた。

「なア周公、昨夜はよかつたらう、面白かつたらう、なおい、どうだ振られなかつたかい？」

「ふゝ、薄笑ひしてやがら！」

彼は半纏に手を通した。すると、彼の手から肩の離れた男は、圖拔けて高い背をのつそりとして、外つ方を向いて粘つた唾液を吐いた。唾液は土手の若草にかゝつた。其若草の連らなる果てに、樹立を置き、家根を並べ、その不揃へな間に際立つた○村の教會の尖つた屋根に、夕陽は今燃えかけて居る。

「どんなことを言つてたい？」

ふとこの言葉だけが彼の口に出た。ふとした昨夜の出來心から、薄のろの男をそゝのかして、新宿の場末に汚れた淺黄の暖簾を潜つたのから、思ひ出はそれへ〳〵と其場の情景を繰つて居るうちに、肥つた女の里訛りがこんぐらかつて、その夜の朋輩が對手の女の顔を思つた時にふつと言葉になつたのである。

「知らねえよ、己らそんなこと！」

大きな男にとつては、これは彼が出來るだけの最も適當な返辭であつた。並はづれて大きな口のあたゝ　極りの悪いさうな薄笑を浮べて、小さな粒々しい目を、眞面に見られ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た魔女のするやうに外らして、紅い空のあたりに遣つて居たが、猪口のあたりに殘つた微笑ともつかぬ微笑みが、そこに人間としての初めての快樂の思ひ出があつた。

「己れの奴がね、今度貴方に襦袢をこしらへてあげませうねえつてたよ、唐縮緬でだとさ」

言はでもの空言である。いつの日に割引の電車の中で、口のゆるい筒袖の三人連れが、あたりかまはず高聲にふざけて居た、其時の話を思ひ出したのであつた。

「だからもつとせつせつと通つてやらう。

「…………」

どうだい…………」

彼は何たしら言はずに居られないやうな氣がしたうぶな朋輩の態度が、もの可笑しさよりもなんとなく羨しいやうな氣がするのであつた。

ふと

「どうだい、少しばかり貸してくれないか」

と彼は男の肩に手をかけて見た。輕い氣持ちだつた。それが眞面目とも笑戯ともつかず。

「なア、少し貸して貰へてえんだが」

ふと此時彼は妻のことを思つた。さうだ！この月が臨月である。毒々しく黑くなつた乳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

首頬くまつはる二人の子供を叱る時に光る目、堪らないやうな肩で押し出す息づかひ――彼は少しく悄氣た。まだ何の用意も考へてなかつた。

「なア周公、少し融通してくんな、ちつとばかり要ることがあるんだから」

彼は聲を優しくして女にする手管のやうに、掛けた手に力を入れて對手の體を搖つた。

「どうだい？」

「…………」

「すまねえがね、全くすまねえがね、己ア奴等のやうに手前を騙すつもりぢやねえんだ、だから初めてよこんなこと言ふなア、そしてこれがおしめへよ、全く少し要ることが出來てるんだ、な、嬶があんなだらう、今夜にも飛び出さねえとも限らねえ、うつかりしてゝ己らつひ昨夜遊んぢやつた、構はねえ誰だつてその出來心つてあらアなア、差配の爺め今朝ア己れの手先を取ッつかまへて怒鳴つてやがつたつけ、尤も己も惡いや、滯らせるのが惡いや、けれども仕方がねえ、質が出せねえつたつて…………」

ふつと彼は口を切つた。恐ろしく生眞面目になつて居たことが自分でも知れた。元來彼は氣が小さかつた。さま〴〵な不義理や不自由を思ひ出すと、それが一々彼の胸の肉を鋭い齒で嚙へて行つた。

手前だつて有り餘つてるんでねえことア己れだつて知つてる――だからあのそら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

品でもいゝことよ、長かあしねえ決して、決して」

繰り返した言葉に彼は力を入れた。全く決して彼は長くしない積りであつた。泣き出しさうな程小さく眞面目になつて行つた心は、ものを積むやうにたゞ目的に向つて働きを積んだ。

「賴むよ、なア」

ふと對手のむッつりして居るのが心許なくなつた。ひよいと鶴嘴の肩を替へた時に、沈み行く夕陽の名殘りが背後になりかけて居るのに氣がついた。あたりを見廻すとよほどもう日は薄れて居る。目先近く踏切りの番小屋が灰色に立つて、〇村の往還に軒燈の灯が薄くちら〳〵してみえる。

「いやに默つてるぢやねえか」

「出來ねえものをよ！」

男はのつそりとして居る。彼はなんとなくむら〳〵とした。男の吝嗇なのは常から知つてゐる。意固地で、その癖うすのろで、へん、それでもあの婆あめ、子は可愛いとみえて、袷せの古などを買ひ込んぢやあ、青梅在から出て來るんだつてね、いつかそれ、己ァこんな工夫なんかしねえたつてもよ、なんて大きいことを言つてやがつたつけ、へん吝嗇め！」

「出來ねえたつてお前………」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「出來ねえつてばよ！馬鹿アいふない！」

「何つ？」

損失には飽く迄も頑強な態度をとる吝嗇の常、男の顔に爭はれぬ強い色を見ると、多はたゞ譯もなく失望した。失望を補ふ忿怒！

「やい！」

力委せに右の手でぐいと小突くと、途端は丁度足を奪つて、わけもなく倒れかゝる男の肩に、鶴嘴が重さをなしてどうと倒れる。隙もなく體は體の上に重つた。胸の上に折つた膝と、頸にからんだ兩手の輪とが、彈機の外れた壓板のやうに力が籠ると、跳ねかへるやうに空を躁く兩足と腕に獅噛みつく兩手とが、益々無我夢中に力を添へる――。

彼はハッとして彈かれるやうに立ちあがつた。我にもなく四邊を見廻すと、不思議や人の影一つない。彼はかへつてそれが怖ろしいやうな氣がした。力の拔けた腕をそゝのかすやうに胸が早鐘を打つ、痲痺れた頭はぶる〱と慄ふ股の肉を制止するすべを知らなかつた。髮といふ髮の毛が逆立つばかり耳の下にぞつと寒い風がふく――一目散に彼は驅け出さうとした。けれども丁度それは夢の運動のやうなものであつた。走らうとする心を體が引き止めた。動かうとすれば心が重く殘つた。彼は無暗にたゞ四邊を見廻した。人の家の灯が遙かに目の底にちら〱する。ふと見ると線路の土手が目の前に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斜めに黑く横つて居た。

沈み終つた夕日の空の名殘りも消えて、若草の線が黑ずんでみえた。横はつた黑い物體のまはりを、彼は輪を劃いてぐる〳〵とめぐつた。その黑い影に解けあふやうに日は全く暮れた。

すが〳〵しい靑葉の世界、初夏の朝に目覺めた○村が、貫かれた線路に氣持よく身輕な電車をすべらしてゐる。それが遙に見えた。村の一部と靑い空地と畑とを圍んで獨立した鐵道線路には、長い客車が走り去つたあとに四本のレールが光つて居た。

ふとひよつこりと現はれた人影、それがすた〳〵と步いて來て、やがて躊躇らふやうに四邊を見廻した。線路を外れて若草の續きに足を入れて行つたが、草にせばめられた溝の淺い水の流れを、あちこち追うて居た目がふと留まると、體をしやつきりとさせてまた四邊に人のないのを確めた。

人影はやがてすた〳〵ともと來た方へ引つかへして行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「丁度私が起きたばかりで、顔を洗はうと思つて井戸傍に出て來た時でした。奴がのつそりと木戸口からはいつて來て、親方大變ですつて眞青な顏して私の前につゝ立つてるんです。尤も眞青な顏もしてる筈でさア、その顏つてねえもんだから、私も一寸ぎよつとしましてね、どうしたんだつて聞くと、人が死んでる人がつて言ふんでさ人が死んでたつてそんなに驚くにも當るめい、一體何處にだいつて聞きますとね、これこれの溝ん中に足が見えるつて話なんでさ、私あ一圖に乞食の行き倒れでゝもあらうと思ひましてね、ぼつとけやい、かゝり合ひにでもなると惡るいやつて言ひますとね、その全く乞食の行き倒れだと思ひ込んぢやいましたんで……奴是非私に行つてみてくれつて言やがるんです、かまことあねえや、手前仕事の出先なら行きがけに交番に聲かけて行きねえつていひましたんですがね、奴どうにもかうにも私に行つて見てくれつて聞かねえんです、私も面倒だと思ひましたが、その一寸やつぱり好奇心でそれぢやあつて出掛けた譯なんでしたが、道々幾つばかりの男だいつて聞くと、二十三四だらうつて云ふんです、私もその時あ氣が付きませんでしたが、今になつて考へて見ると、あゝして溝ん中につゝぷして居る者の年がさつぱりわかる筈がありませ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んや、引き起しても見もしねえてね、手はれねえもんですな、恐ろしいこつてす。だが奴も飛んでもねえことをし出來したもんで……それぢやアお上ぢやもうちやんとお調べがついてるんですかい、眞實に飛んでもねえことをやらかしたもんで……奴あ決して惡人ぢやありませんよ、私も去年の手不足の時に一寸使つてやりましたばかりなんで、その決して深い關係があるわけぢやねえんですがね、決して人を殺さうなんて思つて殺すやうな男ぢやねえと私は思つてるです、途端でさア必と何かの氣負つて來ると馬鹿に調子に乘る男でしてね短氣だけに手は早いやうでしたが、何にしても飛んだこつてす、奴が殺つたんですかねえで奴あもう捕縛られましたんで？」

○村の植木職直次郎が、S警察署の訊問所で申立てたことは右の通りであつた。

植直はほつとして嚴めしい署長の前を離れて訊問所を出る時に、手錠をはめられてしほ〳〵と警官にひかれて來る彼に會つた。

出會ひ頭にふと顔をあげた彼は

「あ、親方、私もこれでやう〳〵安心しました」

から言つて彼はがつかりと首を垂れた。——完——

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

枯草

茅野雅子

君が手の脈かこの手をうつ脈かゆふべの森に音かたかくなる

わが夫ふた月病あり稲の穂に朝風ふけば心かなしき

大なる不幸の來るを感ずるや明日といふ日にこころ戰く

雨七日ふくろのごとき山峽に君とわかれてものおもひをり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君とせし後の世界をおもふほど靜けきこころあはれなるかな

君うすむ夢の世界か湖に火をふく山のあかくうつりぬ

白樺に秋のかぜなる山國のあしたの雲にしたしめるかな

終の日來る心地しぬ枕邊のしろき花さへ水盤にうく

時來れば蛹も繭を嚙みて出づ吾等はふるき世界よりとぶ

女をばなぞ嘲けるや女より生れぬ人のあらじとおもふに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君病めばこころまづしくなりにけり亡びゆく日をみてあるごと

葉のひとつおつる音にもおどろきぬはじめてわれや秋に逢ひけむ

をさなごにまじりてけふも歌うたふ秋の夕日の雲ながめつつ

秋風は君が素足と傍なるなてしこ吹きぬしろき石をも

あるかぎり悲しきなかに手をとりてさみしく笑みぬ十月の丘

わが夢の世界より來し數萬の少さき蝶かもしら萩の花

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人のことわが身のこともあきらかに見えてさびしき日となりしかな

ましろなる菊に似たりと顧みてわが若き日をおもふさびしさ

やや黄ばむ秋の森より鳥とびぬ別れし人をゝ逐ふがごとくに

かぎりなきかなしみ來る日につづくこの日のごとく思はるるかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

道子

荒木郁子

チヨセフの室に這入つてドアをどんと固い音させて閉めた時、道子は厭な氣持がした。野良犬みたやうな彼の心、其れをよく現した肉感的な赤い鼻むやみに高い脊丈を對手に釣合のとれる丈け丸く曲げて、近寄つて來る容姿にむ、つ、と咽せ返つた。と、同時にそれを知りながら訪ねて來た自分の心の底にうづくまつてゐる汚い或ものが、電光のやうに、ぱつと眼の前に閃めいた。

道子は撓んだ心に映つた閃めきを押隱さうと焦つた。焦れば焦る程込上げて來る不快の情をせゝら笑つて心の中に恁う叫んだ。

「何の、何のたゞ金を貰へばそれてよいんだから、而して又、呉れるだらうからて其の貰ふ迄の辛棒だ」と、

「チヨセフさん暫くてしたわね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「まあお道さんよく來ました」

ツフハーを勸めてヂヨセフの手は戰へてゐた。それを道子は何とも感じないやうに、極く華やかに笑ひながら彼の手を握つて美くしい表情の多い眼を働せた。

「來やう來やうと思つて居たんですがね、多忙かつたんですの……あ、それから、之れは貴方に御送りする爲めに備へましたのよ、好ひ香でせう。」と花束を圓卓の上に置いた。

ヂヨセフは烈く周章たやうに、有難う、有難うを繰り返しながら花束に接吻して、室の中を步き出した。而して鏡の前に立つてネクタイを押へて、髮を烏渡手で撫てゝブローチを差變へ、道子の前に來た。

「貴女よく私を忘れませんでしたね。忘れましだと思ひました。私は毎日〳〵貴女のことを考へました。」

「さう。有難う。」

「有難う? え、眞個有難? 私好きてすか」

ヂヨセフは、道子の兩手を握つて同じくツフハーに腰を掛けた。

「けれど……」

「なきなら何故來ませんでした? 私毎日〳〵待つた、眞個ね、待ちました。」

「私ね、私…… 貴方を好きてすけれど、種々用事澤山〳〵ありましてね、それて來ること

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の出來ませんでしたの。」
「何の用事。」
「何だつて好いぢやありませんか、私の用事私丈け知つてゐる用事。」と捨てばつけな口調で云つた。
「貴女だけの用事？面白い用事ね」
ヂョセフは譯もなく笑つた。さも可笑さうに笑つた。笑ふ度に道子の手を握りしめて高く振つた。それでも道子は何とも云はぬ。手を振り離しさうにもしない、唯々される儘に任してゐる。而してぺつたりソファーに身體をおつつけて、妙に人をそゝるやうな容姿をした。
「お道さん、貴女此頃何處にゐます？」
「私？私ね好い處にゐますの。淋しい〳〵ことをして、だけれど淋しいのは心丈けだわ。身體は矢張り元々通り賑でもあるし又面白さうよ、………こんな話、したつて貴方にゃ解りやしないわね」
「解らないことありません。此頃何でも解るやうになりました。」
道子の閉めたドアを輕く打つて、僕のアモンが紅茶と御菓子とを持つて這入つて來た。彼の頭は、日本語が少つとも出來なかつたんだがと思つて男の顏を見た。輕く笑つた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アモンは、世辭らしく
「暫らくてした御道さん」と音のよい日本語で云つた。
「アモンさん。私を忘れなかつたのね。彼頃には日本語が少つとも出來なかつたんだが」
にこ／＼しながら戸を閉めやうとしたアモンに、ヂョセフは何か大きな聲で命じた。
外には蜩が忙さうに啼き出した。窓から、ぱつと淡い夕陽が差入つて、冷めたいマントルピースの上に飾られた石膏像の白い額に、そつと接吻した。
道子が始めて此石膏像を見たのは、一昨年の丁度今頃であつた。其時分ヂョセフは、橫濱山の手通りの小高い丘に住んでゐた。道子は其家に出入する商人の娘であつた。
女學校を中途で停めてぶら／＼遊んでゐた道子はつゝましい裁縫や、お花のお稽古に落着いてはゐられなかつた。と云つても、家事の手傳や、弟妹達の世話をする氣にもなれなかつた。自尊心の強い道子は、近所の若者對手にさわぎ廻る娘連の仲間入もしなかつた。
とも角、若い人達丈けに與へられた華やかさと、特に自分が持つて生れた眼の美くしさとを無用にしない丈の考はあつた。
折々商賣上のことで番頭代りに好んで出かけた西洋人の家の空氣を吸ふ道子は、美くしい花の香、それ等から呼び起される歐洲の華美な街のすがた、夜會に咲く紅い花の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かほりなどがまぼろしのやうに道子の胸をかすめた。

或日のことである。道子はヂョセフの家を訪ねた。妻君のない若いヂョセフは、可愛い道子の口から自國語の片言を聞いた時大變に嬉しく思つた。始めて會つた日からヂョセフは道子の美くしい眼と、快活なそぶりとが氣に入つて了つた。道子は而白半分に片言の佛語でいろんな話をした、赤や青や紫の奇麗なガラス戸のあるカトリックの敎會へ度々行つたことも話した。それから其敎會に附屬してゐる小學校出身であるといふことも話した。佛蘭西好の道子は、其後も度々ヂョセフの家を訪ねるやうになつた。而して、時には、晩餐も共にした。一緒に散歩もした。道子はたゞ佛蘭西の話が聞きたい許に、ヂョセフの許に通ふやうになつた。

然しそれは長い間ではなかつた。萩の咲き初める頃から、漸く紅葉の霜に遇ふ頃迄の事であつた。その短かい日と日との間を二人は、長い年月のやうに、幾度も繰り返したことのあるやうな氣分で、大變に親しい日を送つた。所がヂョセフの職の都合で二人は、一緒に佛蘭西のあどけない夢を見ることが出來ないやうになつた。

天長節の翌日にヂョセフは、道子に築地の此度住む家の番地を書いて渡した。其夜はもう東京の人となつたのである。

好奇心な道子は住み馴れた横濱より東京の廣い町を憧れるやうになつた。それに、ヂ

ヨセフといふ話對手もあることだから、又好いきつかけでもあるからと思つた。それて行つてみやうといふ氣になつて父母に話した。然し父も母も其れには大の反對あつた。止められたので尙行かねばならないやうな氣持になり、いこぢな道子はヂョセフが發たつて一週間と經たない中に、横濱の長く住みなれた家を惜しげもなく振り捨てた。

目と鼻の間ではあるけれど、物の心を覺えてから、未だ一度も來たことのない道子は、東京の明るい街から、今迄經驗したことのない、和らかな淋しい、又、深みのある何物にか觸れたやうな心持であつた。唯々もう、一足先に流れてゐる銀色の瓦斯の光のやうなゆつたりした心持になつて、眼新らしい街を左へ、右へと迷つてヂョセフの家へと着いた。

築地の此家に厄介になるやうになつてから、間もなく又も此家を無斷で出た。それはヂョセフが眞面目な同情とか愛情とか以外に、特に異性丈に求むる或るものを要求したからである。

道子は極く無邪氣な小娘である。向ふ見ずの御轉婆でこそあつたが、荒んでこそゐたが人の心の裏に潛でゐる、よどみや、世間並な浮ずつた交際の中に覗かねば見えぬものを、見やうとする女ではなかつた。そのやうなことは全て知らない處女なのである。此の小さな面白がりやで飛びつかゝり娘は或る夜一睡もせずに、將來のことを眞面目に考へた――それはたゞもう自分自身の幸福といふことについて。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

而して翌朝ヂョセフの家を暇乞もせずに、立ち去つたのである。

淺草新福井町は汚かつた。築地の美くしい建物からみると豚小屋のやうに汚なかつた。殊に道子の訪ふた家は烈かつた。煤や塵で塗り込まれたやうな古い柱はゆがんでゐた。薄暗い茶の室には出來かけの細工物や、木の箱などが一ぱいに積み重ねられてゐた。その殘つた僅かな二三疊には、火鉢や茶盃やらうすゝ汚れた座布團やらが亂雜にちらかつてゐた。流石に簞笥丈はてか〳〵赤銅色に光つてゐた。小さな姪や甥がうぢや〳〵泣くやらおこるやら全て動物の住所のやうであつた。其むさぐるしい一種の長屋の臭氣のたち籠めた叔母の家に暫く厄介になることに定まつた。

此家には女と男と取り雜ぜて二三十人の職工が毎日通つて來るのである。裏の日のあたりさうもないしけつた三軒長屋を打通しの工場からは、堪へがたい程やかましいわめき聲が聞へて來る。横濱の貸家に飾られた美くしい刻物や細工物、高價な種々の置物等が斯ういふ人間離のれした住所から生れてるかと思ふと、美術家に對する尊敬と、美といふ文字に對する憧憬の情とをそゝがれるやうに思へた。と同時に努力に對する報酬の充分でないといふことも考へずにはゐられなかつた。終日働いてゐる彼等には人間らしい喜と幸福とを享け入れるには餘りに忙し過ぎる。餘りに貧しすぎる。などと、自已離れのした生活問題や、彼等下級人民に對して冷酷な社會に烈く不平を持つやうに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつた。

「どんなに働いてもあれなんだもの」

道子は度々慥な獨語を云つた。道子の地についてゐない足は此頃から漸く確りして來たが又、飲めもしないお酒を臺所で自分の茶碗に注ぐ位の藝當もやるやうになつた。歸家から聞き覺へた、——

花の曇が遠山の雲か花かは、白雪のなかをそよ〳〵吹く春風に浮寢誘ふやさゞ波のこゝをかもめの都鳥………

なんて、口三味線で、調子合せる事も出來るやうになつた。それから裏へ來る職工を捉へて淡薄した、戲談も云へるやうになつた。其年も去つて春が來た。若々しい氣の起る飾も松竹も、道子には淋しさ哀しさの變化とより外には思へなかつた。道子は哀しくかたまつた大人になつたのである。長い間喰みつひてゐた子供ぢみた嬌さや、賑しい初々しさたは何處へか去つて了つたのである。

道子の行末を掩ふカーテンの前を、走馬燈のやうに、廻つてゆく、暗い影と、やるせない疲れ切つた自分の姿をうつとり引きづり込まれるやうに見入つて居た。而して時には獨語を云つたり、人の前に來て長い間物言はなかつたり妙に落着かぬやうになつた。此頃道子の心は一種の精神病者のやうになつたのである。兎も角雨か雪か模様替へを見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ずへには濟まされぬ狀態であつた。丁度雷の鳴る一時間前のやうに、地震のゆる前の日のやうに——椿の花のやうな道子の心は、細い指一本さわつても、もろく落ちるのである。張りつめてゐる道子の心は其細い指の一本を待つてゐたのである。其の悲しい宣告を待つてゐたのである。

道子は或る日叔母の家を又も無斷で飛び出した。而して或る男と一所に何屋かの二階を借りて、有邪無邪な日を十日許し笑ひくづした。

「何したつて好い生活は出來やしない。終日働いたつて、又働かなくつたつて似たやうなものだ貧棒娘は成丈け樂さうな仕事を探し出した方が勝なのだ」と、慇な暢氣なことを云つて男と別れた——朝から晩まで同し男の顏を見て暮すといふことに飽いたのである——而して料理屋の女中になつた。それから、田舍の宿屋へも行つた。下宿屋の女中にもなつた。而して今は工學士の篠田といふ國元には妻も子もあるものと同棲をするやうになつた。

篠山は遊人に學問をさせたやうな男である。

田舍の富豪に金を出させて高等學校から大學迄行つた。其富豪の娘である彼の妻は、彼の幼い子供と一緒に實家にゐるのである。

家庭があつてないやうな彼は、月給の全部で自分と、道子との生活に足りれば好いの

てあつた。二人の關係は非常に自由なものである。外國にあるとか聞いた自由戀愛俱樂部とか云ふものでも此の家庭には、一歩を讓るであらうと思はれる。兎も角、二人が愛し合つてゐたといふ事は事實であるが然し、お互に女も男も一週間も顏合せずに過すこともある。それは、互に出歩いたり。又、各自の情人の處を尋ね廻つたりするからである。それを二人とも、別に不思議とも思はない。篠田が月給日から十日も歸つて來なくとも道子は濟ましたものである。お金のある間丈は出歩いて相當の散財をして來るが、失くなつても一向に案じないのである。そんな時は、知人の許に駈け込んだり又、篠田の着物や書物を質店に任せたりするのだ。その方法がつきた後は以前關係したのろま男の處を訪ね廻つて絞れる丈絞つて來るのである。だが萬一先方で烈く困つてゐるやうな風だと、Aから貰つたのをBの處に全部置いて來るやうなこともした。今日は其等の方法を盡きたので仕方なしに何年も來なかつた思出の多いヂヨセフの家に來たのである。

「お道さんお食りなさい」ヂヨセフは圓卓をぐるつと廻つて道子の隣へ腰を掛けた。而して又落つかぬ風に立上つて室の中を歩き廻つてドアを開けて見廻してポケトから鍵を出してカチンと云はせた。道子は何も氣附かないつていふやうに、そのくせヂヨセフの心は一から十迄飮み込みながら初心らしい顏して

「ヂヨセフさん。私ね今日お金を借りに來たの」と小さい聲で、戸口からソフハーの方寄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて來る彼の腕を握つた。而して甘へるやうに下から其赤い鼻を見た。

「さう宜しい。」

彼は、其後それにつひて何も云はなかつた。たゞ物言はずに、ソフハーへ腰かけた道子の美くしい姿に見とれてゐた。

互に逢ふ意味で荒び切つてゐる二人の呼吸する此室にも和らかな夜の幕は下りた、ひつとりした燈火の花も咲いた。

やがて運ばれた食事を二人ともおだやかでない氣持で濟した。道子はウヰスキーをと自分から云ひ出した。酒嫌なヂヨセフは、道子の醉ふて喋舌るのを嬉しさうに打守つてゐた。

而して、も一杯、も一杯と可成餘計に勸めた道子は前後不覺になる迄も自分で望んで飮んだ。

其夜はとう／＼ヂヨセフの家に泊つた。

翌朝道子は新らしい改正の札五枚を無雜作に帶の間に押込んで「もう恁んな家に來るものか」と皮肉な調子で心の底に叫びながら小さな鐵の門を出た。

秋の朝空は高く廣がつて、誰れても其の大きな胸の中に抱いて吳れさうである。（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

言葉の力

ポオ

オイノス。アゲートスよ。不滅の羽翼新に生ひし靈物のはかなさを咎むる勿れ。

アゲートス。我がオイノスよ。汝は許されむことを希ふが如きことを語らず。知識は直覺によりて得らるべきものならじ。されど智慧を得んとならば與へられむことを心行くばかり天人に求めよ。

オイノス。されど我れ、此の世界にありては一切の事物立ちどころに認識せらるべく且またかく一切の立ちどころに認識せられし時、幸福の來るべきことを夢想せり。

アゲートス。ああ。幸福は智識の中のものならじ。寧ろ智識を得むとするところ。永遠に知らむとすることによりて我等は永遠に祝福せらるゝを。されど一切を知ることは惡魔の呪咀ぞかし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

オイノス。さはれ最高なるものは一切を知れるにあらずや。

アゲートス。一切はなほ彼にさへ未知の一事ならざるべからず。(彼は最大の幸福者なるが故に

オイノス。とは云へ、我等は、知識によりて、刻々に成長するものなれば一切の事物いつかは知り盡さるゝ日あるべしと云ふに何の障りかあらむ。

アゲートス。我等かく星の中緩やかに分け行くとき、かく緩やかに分け行くとき、數多き星の並木に瞳を凝らせ、深淵の遠きかなたを見よ。靈的幻影さへ、四周おしなべて宇宙のすきなき金壁に遮えきらるるにあらずや。金壁は無數の光體にして、數の大さのみを以つてするも單一に歸入するかとぞ思はるる。

オイノス。我は明らかに認む、物質の無限は夢ならず。

アゲートス。Aidenn に夢あるなし。唯斯くの如きことぞこゝに囁かる、物質の無限に於ける「唯一」の目的、そは靈魂の永久に、内に押へんとして押へ難き知的渇望(知的渇望の癒やさるゝはやがて靈魂其みづからの消滅なるが故にを癒やす無限の泉む供するにありと。さらば我がオイノスよ、心行くばかり安んじて我に問へ、いざ! Pleiades の聲高き調和を左に見捨てなむ、いざ! 玉座より菫花咲くそれならでオリオンの彼方、大いさ三倍なる三色の太陽等がしとね、かの星しげき牧場まで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

浮び出でなむ。

オイノス。さてアゲートスよ、教へよ！下界の親しき聲音もて語れ。我等人間の間にありし頃常に創造と呼びならはされたることにつきて今汝が仄めかせしその様式と方法を我は悟らず。創造主は神にあらずと云はむとするや。

アゲートス。上帝は創造せずと我は云はなむ。

オイノス。語れ、其のいはれは。

アゲートス。只發端に於て、神創造せり。かくも存在の中に不斷に發出し今や宇宙に遍在せる外觀上の創造物は神聖なる創造力の間接の結果と思惟せらるゝのみ。

オイノス。我がアゲートスよ。こは人間に異端の極みとや思はれむ。

アゲートス。我がオイノスよ。そも亦天人には只眞理と見倣さる。

オイノス。汝の語りしところにして我が了解せしはこれに過ぎず、即ち自然、あるは自然律と稱する活動によりて或條件のもとにあらゆる外觀上の創造を生ずることあるべしと云ふことと是なり。あり〳〵と思ひぞ出づる、下界滅亡に間近き日、哲學者が小動物の創造に命名するにいづくに十分の弱點ありしかをさま〲の實驗もて曝露せられけるを。

アゲートス。汝の語るところは全く第二の創造の場合なり。第一の言葉、第一の法則を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二この世に語りし以來常に行はれける創造の場合なり。

オイノス。　虚無の深淵より天上に流れ出でしこの星しげき世界ーアゲトスよ、これらの星はなほ神がみてづからの意匠ならずとや。

アゲートス。　オイノスよ、我が抱ける概念に歩一歩と汝を導かなむ。あらゆる思想の不滅なるがごとく、如何なる動作も無限の結果なきはあらじそは汝のよく知るところなり。例へば、我等下界の住人たりしとき手を動かしぬ、ために下界を包める大氣は震動せり震動は漠然として四邊にひろごりゆき、はては下界の空氣の分子ことごとくに衝動を與へぬ。かくて永久に一擧手の動作は下界の空氣に影響するなり。地上の數學者は此事實に通曉せり實に彼等は特殊の衝動によりて流動體に生じたる特殊の結果を正確なる計算の主題となせり。一定の範圍の衝動が地球を圍繞し、大氣のあらゆる原子を壓迫する期間を精細に決すること容易なるに至れるはこの故なり。彼等はまた逆行して、一定の條件のものとなる一定の結果より最初の衝動の價値を決するに何等の困難あらざりしを知りぬ。今數學者は與へられたる衝動の結果の絶對に無限なるを、次に其結果の一部たるや代數的解析法によりて詳細に追索せられたるを逆行も亦容易なるを見き、それと同時に此種の解析はそれみづからの中に限りなき進歩の能力を有し、その捉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

出と適用は、掘出者若しくは適用者その人の智力を除きては何等の限定せらるゝところなきを見き。されどこゝまで歩み來りて數學者は逡巡せり。

オイノス。アゲートスよ、なんすれぞ彼等は前進せざるべからざるか。

アゲートス。かなたに深奥にして與多き思量こそ存せしなれ。そは彼等が知れるものより推論せらる、即ち完全なる代數的解析の開かれたる全智者にとりては空氣のみならず、空中の精氣、幾世の昔、いとも遠ざかりけることどもにまで、與へられたるあらゆる衝動を容易に追索し得るてふことと是なり。ずべて空氣に與へられたるかゝる衝動は終に宇内に存在する個物をのこりなく壓迫すべきものなることは實に論證するに明かならずや。我が想像の全智者は衝動の遠き波動を、全物質のあらゆる分子に及ぼすそが影響、舊き形體(かたち)の變化の上即ち新らしきものの創造の上をとこしへにいづこ迄も追索しえらるゝなり。かくて彼は神の玉座より反射し來る衝動の消え行く最後の力なささまでも見きはむべし。たゞにそれのみならず、それがしの時一定の結果の與へられむか、—例へば、無數の彗星のひとつ、觀測の中に現はれむか、彼は解析的逆行もてそが最初の衝動のほどを決すにいと易し。もとより絶對に完全なる逆行の力は上帝の特權たるのみ。—されど未だ絶對の完全に達せざる各種の階級にありてはこの力それみづから天人の睿

智もてるなべての大衆にぞ用ひらるゝ。

オイノス。とは云へ汝は空氣に及ぼす衝動を語りしのみ。

アゲートス。空氣につきて語りし時我れは只下界に説き及びぬ。されど一般の命題は精氣に及ぼす衝動に關せしなるを。精氣は全空間に遍通する唯一のものなるが故に、かくも偉大なる創造の中間物たるなり。

オイノス。さらば一切の行動はその性質を問はず創造するや。

アゲートス。さ、あるべきなり。さるを眞正の哲學者は一切の行動の源は思想なりと教へしや久し。――而して一切の思想の源は……

オイノス。神ならずや。

アゲートス。オイノスよ、我れはひとりの小兒につき、過ぐる日滅びだりし美しき下界につき――下界の大氣に及ぼず衝動につきて汝に語りたり。

オイノス。さなり。

アゲートス。我れかく物語りし間、言葉の物的の力に關する思想は汝の心をよぎらざりしや。一切の言葉は空氣の衝動とこそ知れ。

オイノス。されどアゲートスよ。なんすれぞ汝は泣くか。なんすれぞ。オオ、なんすれぞ我等今この美しき星の上をさまよへるとき、汝の翅はしぼたるゝか。こは我等が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飛行の間にめぐりあふなべての星の中なるいとも恐ろしき星なり。緑色また上なき星なり。美しの夢か、目映ゆき花よ。されどこの烈しき火山は亂れたる胸の熱情に似たり。

アケートス。この目映ゆき花は！――目映ゆき花は！このあらぶる星は今日ぞ生れし思へば我れ戀人のかたへにありて、組みしめたる雨の手と、かゞやくまなざしと、烈しき言の葉の三つ五つもて、豫言せしより三世紀の今日ぞ生れし。この目映ゆき花はあらゆる見果てぬ夢のいともしたはしきものなり。しかもこの狂へる火山は動亂と邪惡の限りをつくせる胸の熱情なり。

――完――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

菊日和

白雨

何の功曾祖に贈位や菊日和。

叡感三度蛟庵菊に盧を出づる。

富士の眺め黄菊白菊畑續く。

菊に凝る老翁雙眼の士に祕を語る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○山鳴の絶へしが久し暮るる秋。

白鳥の眠りも畫題秋雨のして。

土潰せし山裾にして女郎花。

人の子の親ともならず秋の暮。

肥を願ふ郎が秘術や渡り鳥。

○地裂して湖埋めし古話の山眠る。

ふと解雇し老婆哀れむ夜長かな。

初秋

上田君子

久代は珍らしく泣けるのがうれしかつた。まあ、不思議によく涙がわいてくれる。もつと澤山泣いて見たい、などゝ見ひながら、泣きじやつくりして絣の袂で涙を拭き〳〵した。が聊かの傷から搖ぎ出した取り止めもない悲哀は、いつかもう涙と共に流れ出てあつけない程胸には何もなかつた。

井戸端にしやがんで居る久代の後を、鶺鴒がギッキッと鳴いて飛んでいつた。やせた秋海棠の小さい花や葉をうつして、井筒の桝から絶えず流れ出る堀井の水が、さら〳〵と秋らしかつた。

「アラ、姉さんが泣いてらつしてよ。さつきの事を怒つたんかしら」と、奥の間で久代の男の兒を遊ばせて居た母親に告げて居る妹の聲を聞くと、フト久代は袂を下して顔をあげた。思ひ出した樣に盥の濁つた水をあけて、先刻洗ひ上げたおしめのバケツをさげて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

物干場の方へ急いで出ていつた。

「乾度お前なんか氣にさはる事でも言つたんだろう」

「私そんな積りぢあなかつたんですけど。」

「だからいつも言ふぢあ有りませんか、一體お前ははしやぎ過ぎだよ。」

「やつぱり？」と彌生は針の手を止めて笑つたが

「母さん何てしたつけね、雛子も鳴かずば撃れまいものゝといふのは――」

「そらまた、此のお雀さん上の句を忘れて了つた。」

「よくつてよ、今思ひ出すから、」

「よくないよ、思ひ出す前に嘛はふんです。」

母に叱られ乍ら彌生が矢張り笑つて考へて居ると、少し眼を赤くして久代の襷をはづしながら這入つて來た。

「ねえ、姉さん今私母さんに叱られてる所なの」

「アラ、彌生ちやんの言つた位の事で私、何時迄怨つてるものですか。」と笑顏して、「だめよ、彌生ちやんなぞに私の涙はわかつてくれない。」と強く言つたが、それは甲斐ない復讐だつた。彌生は何の感じもない樣に、生々した眼を動かして針の手を止めなんだ。年とつた

母と普通の娘の心を持つた妹、自分の思ひを語る人ではなかつた。斯ういふ時久代はいつも、遠く離れて居る夫を思ひ出した。

「開け放ちた櫺子窓に背をもたせて、見るともなしに芳坊を眺めて居たが、繪本を見て居る一人前らしい樣子が、フト不思議に思はれて、輕い驚きか暫時久代の胸を浪うたせた。父によく似た芳坊はいつになく靜かに、祖母がくつて吳れる繪本の動物を覗き込んで、どれもこれも皆、ニャア〳〵と言つては笑つて居つた。

「久代さんお宅」と、道子が久しぶり尋ねて來た。座敷へ通ると邊りを見廻して、「よつちゃんは居ないの」と袂からゴム人形の可愛好いのを引つぱり出して振つて居たが、

「今ねおばあ樣におはれて出ていたの。」とお茶持つて這入つて來た彌生が言つたので、さもがつかりしたらしく久代の前にペッタリと座つた。

「明日もう歸校ることにしましたの。」といきなり言つて、まあ此の人は何時までたつてもちつともお母さんらしくならない、と思ひ乍ら、ポッと上氣した白い額の汗を拭いた。

撰む に自由な商買柄だとはいへ、道子の好みは何時も派手だつた。白地に麻の葉くづしのメリンスの薄い地から、濕みを持つた滑らかな肌が、思ひやられるほど今日はなまめかしかつた。何處から女學校の先生らしい型が見出せよう。まして久代より四つ年上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の二十九などゝは知らぬ人には思ひもよらぬ事だつた。知らず〱淡い妬ましさから、友のものこしにも何となく注意して眺められた。然し其れもしばしして、いつもなつかしい睦みを覺える都の近況や友達の噂、斯ういふ話は事もなく若い二人が一所になつて思ふ存分喋いて見たい樣な、輕い心持ちに誘つていつた。

道子は少し膝を崩して、小さい聲で讃美歌などを唄ひ、「彌生ちやんも出て入らつしやいな。」などゝ大きい聲で呼んだりした。

「あなた今も敎會へいらつしやるの。」と久代がきくと、

「たゞ歌だけ敎へになの。」と、氣作に笑つて、何とかいふ背の高い西洋婦人がピヤノを彈く妙な手つきや、いつの集りの日にても乾度涙を出して悔悟する。年若い或る熱心な學生の眞似などした。

「きのふ手紙が來て居たわ、その人岸本さんと言ふの。」

「何か面白い事でもあつて？」

「どうだつたか、私少し讀みかけてよしちやつたから。其の事もなげなのが、戲談とはきかれなかつた。道子には有り勝ちの事の樣に思はれて、

まあ、貴女にはうつかり手紙は上げられない。」と久代をあやぶませた。ふと思ひ出して

「此の間伺つたお話は」と言はふとするのを、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あの話なら止めにして下さいなあれつきりなの。」と手て止めて道子はたゞ笑つて居る。

「また？好いのを三つ迄一度に伺つたぢあ有りませんか。」と云ふと久代は何となく可笑しくなつた。

「貴女のすきな紅入友禪の帶も駄目になつてよ、でも思ひ切つて手放そうと迄、決心なさつたお父様が感心ね。」

「手放すも手放さないも始終私が家に居ないのだから仕末がつかないわ。」と道子は獨りできめて、「でもね、私オールトミスにもあきちあつたの、うるさくつて。」と一寸眉をひそめたが、艶々しい顏の何處にも暗い影は一つも無かつた。

「私なら、あの美しいお店に座つて見るんだけど」久代がいふと、

「なら乾度店が繁盛してよ。美しい男でも來たら特別まけてやるんだたわ。」とすまして居る。

「ほうら、何とか言ひましたつけ、捨られたかの番頭さん。」久代はついこんな事をきいた。

「エ、賢吉の事。」

「今どうしてまして。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「知らない。」と道子は無雜作にいつて「私そんな事など考へたこと有りませんの、眞實の母の事だつてそうですよ、考へて見たい樣な、なつかしい樣は事は過ぎた中に澤山有る樣だけど、どうも今の私とは、さつぱり關係のない事の樣にしきあ思へないのですもの。」

フト久代は紅友禪や五色のいろ絹、そういふ中に道子を浮べて見た。軒を並べた呉服町でも殊に此の店は大きく派手だつた。夏の夜など、まばゆい許り電燈の光りが輝いて、店先の硝子戸棚には、粧ひ凝らした粧飾人形が、道ゆく若い人々を、交る／＼止めさせた。が明るい此の店から壁一重へだてた奥はいつも暗かつた。もの堅い商人氣質の年とつた父、しつかりと一人で店を切り廻して居る若い繼母、一人娘の道子がまだ物心つかぬ頃でさへ、三人の心はもう散り／＼に淋しかつた。町の舊家によくある例で、道子の幼い時から決められてあつた繼母が氣に入りの若い男は、道子が都へ出たあとに行衞をくらましたとさへ聞いて居る。

「こうしてる内にはどうにかなるんさ、先のM町やK市より少しは面白い樣だけど、然しS市ももう大分見あいたわ、どうせ風のまに／＼ならもつと芳烈な刺激のある所へいつて見たい、いつそ滿洲へでも飛び出そうか、」と一寸頭を傾けて見て「それよりも米國の方が好いかも知れない、何處かには屹度私の心としつくり合ふ處が有りそうに思はれてならんのよ。」と憧憬の眼を光らせた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

軒の風鈴がリン〳〵と簾を透して涼しい風が流れ込んだ。久代は時々芳坊の泣き聲を何處かで聞く樣で、フト遠くから呼び戻されては耳を澄ましたが、全くそうではなかつた。うち出來の下手なカステラを淡白しておいしい〳〵と言ひ乍ら、香の好い麥湯を呑み〳〵して道子は話した。

「一體男つて妙なものですよ」と如何にも男を知つたらしい大膽な口ぶりも、道子自身では何の氣でもなかつた。

「よくお話した從兄の三木ね、いつもやれ婦人問題がどうだのかだのつて私をおだてゝ居た癖に、何時の間にか怪しげな女に引つかゝつて、とう〳〵此の間背ひ込んで了つたんですよ。

「ほゝ、全く貴女なぞは文明國の良材料位に思はれて、敬遠されていらつしやつたんだわ。」

「矢張り彌生さんの樣な心持ちで押し通す方が好いのかな。其れぢあいつそ、かの話の博士さんの處へでも嫁つてやりませうか、お爺さん〳〵つて私可愛がつて上げるわ。」と肩をすぼめて「でも乾度長くて三日位の辛抱よ」と久代を笑らはせた。

Sといふ港の賑かさ、其處の學校の話なども出た。「來學期はね、姙產婦の心得なの、私困つちつた。」と一人でクス〳〵笑つて、道子は自分の受持ちの家事科の事を可笑し相に話

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

し「貴女に少し敎はつてゆかなくつてあ」と言ひ〳〵したが、別に其れを聞く樣でもなかつた。

「貴女よく御存じの美保子さんね、あの方の妹が私の學校に來てますの。」

「またどうして其んな遠い處へいつてるんでせう。」

「親類の家が有るんです、初めは私も知らなかつたの、其れが職員間の注意人物になつてましたもので探つて見ると美保子さんの妹ぢあありませんか、性格なぞさつぱり姉さんとは違つてますのよ、其れに一つ惡い癖があつて――」

「私一度も美保子さんから妹があるなんて聞かなかつた。」

「さうでせう。どうも妾腹の子なんからしいのよ。」

と道子は一人でうなづいて居た。

まだ轉任して間もないS市の話の中にも耳新らしい事は澤山あつた。

「彼地へいつて間もない事でしたわ。校長の宅につい長居してね、夕ぐれの海を眺め乍ら初めての海岸を歩いて居た歸り道でした。「如何でせう、器量はあまりよくないが××を卒業してます。」といふ男の聲がフト私の耳に這入つたんです、咄嗟、私はハツト自分の事の樣に驚いて振り返ると、直ぐ傍の松の下に、一人は立つて一人はしやがんで話して居た二人の男が一所に此處を向いてじつと私を眺めました。私ポツとして終つたわ、ア

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アいやだ、今迄に幾度私は斯んな事を斯ういふ言葉て人から人へ傳へられたてせう、わづらはしさから逃れて來た二百里の此處までやつぱり私を追つかけて聞かせに來る。私はひどく恐怖に打たれて了つてね」

いつにない眞面目な話ぶりが久代の耳を欹てさせた。

「偶然てせう、けど全く妙なことが有るものね。」

「其れから暫らくして私は初めての道をどう歩いたのか、どの家も〳〵格子作りの屋並のよく揃つた明るい町を歩いてました。涼し相な打ち水や、三味線の音や、若い女が取り〳〵の粧ひ、夏の夕ぐれの空氣は人の心を心持ちよくとかして行く樣でした。フト手すりのある二階から、仇な女が立て膝して凝然とゆく人を見下して居るのとバッタリ眼が出合つた時、自分の事のみに屈托して頓つて居た私の心も、何がなしに驚かされずにはいられませんかつたわ。港の色町は廣いのね、賑かね。」

ふだん呆氣ないほど冷淡らしい道子は、時によくこんな感慨めいた情緒を吐き出す事が有つた。久代はさつき自分の泣いた、一つ〳〵を美しく彩つた繪卷物にして、見せられる樣な氣分になつて凝明ときいて居た。

芳坊がヤア〳〵と大きい聲して泣き乍ら、彌生に抱られて這入つて來た。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おかへりよ。ソーラ此の人形好きでせう、押へると鳴くんですよ。」とさも可愛らしくて堪らない様子に、覗き込んであやして見てもちつとも泣き止まない、見かねて久代が胸を開らけてたゝいて見せると、俄かに元氣づいて如何にもうれし相な笑顔で這ひよつて來た。大きい乳房に、手を置いて、苦し相にクックックと咽喉をはづませ乍ら飲んで居る様子を見て居ると、何となく道子は可笑しくなつて來て

「妙ね何だか動物見だいて」と笑ひ出すと、彌生はさも吃驚した様に顔を上げたが、「アラ姉さんは昔から人間よ」といつて二人はコロ〳〵と笑つた。

「彌生ちやんのほんとに大きくなつたこと、女學校を出るとあんなにも俄かに娘々として來るものかしら。此の次には赤い花を買つて來ませうね。」とだしぬけにいはれて

「有り難う。先生此の頃は白粉もねるんですよ。」と彌生はおどけるのが上手だつた。

「好いわよ白粉は、其れより彌生ちやん、私お嫁にゆきたいの、と言つた風するのだけはおよしなさいよ、お願いだから。」と言つて道子は彌生を凝然と眺めて居た。

「あーら、樂隊だわ」横町を通る樂隊の騷々しい音が、一番に彌生の眼を光らせた。

「末松座の活動よ、ゆきたいわね。誰れか被居やらない事。」と二人を見較べたが、姉の動かない顔を見ると直く道子の方へ眼をむけて

「だめなの貴女も。お別れに一度一所にゆきたいわね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「仕様がない人、ぢやあ一度一所にゆくとしませうか。」と道子は易く引きうけた。
「さあ、おんぶだ〳〵、」と彌生は周章て芳坊をおんぶして馳し出したので
「彌生ちやん草履をはいて入らつしやいな、轉んだらどうするの」と久代は追つかける様に注意した。
「芳ちやんに見せるより自分の方が見だいのだもの」
と獨り言の様にいつて、道子は下葉の色付きかけた葉櫻を眺めながら、椽端へ出てトン〳〵〳〵と樂隊に合せて足拍子を取つて居た。
澄み切つた空から降りそゝぐ熱の心地好い漂ひ、萩の亂れて庭の隅にはコロ〳〵と蟲もないて如何にも氣節の變りめを思ひ出させる様な午後であつた。
「いつまで貴女は若いのでせう。貴女を見ると何となく、衣通姫を思ひ出すの。」と、久代はいつて、さつきから秘密に胸にしまつて有つたものを、やつと出して了つた様な氣になつた。
「あら折角のお世辭なら、玉藻の前と言つてほしかつた。」とにつこりして「ほんとに私、殺生石になつて了ひたいわ、ね久代さん」と引き入れる様に道子は言つた。
――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼玉

白雨

私は眼玉が大好きだ。葡萄色に圓く光つて居る瞳！底深く清く澄んで、輝いて動く人間の眼玉！。

私には一體悪い癖があつた。其は凝視(みつめる)と云ふことで、眼玉に觸れるものは何んでも、のがさず底深く見極めたいと云ふ願望(ねがひ)を心の奥に持つて居た、が中でも人の眼玉を見ると云ふこと程愉快なものはなかつた。其が此の節では習慣性になつて、無意識に、たゞ一種の趣味を以つて會ふ人ごとに眼玉を見て居た。

此の筆方を度々あびせられて居た友は、私とむき合になる事を嫌つて決して私の側によつかないのである、別に私に心の底を見ぬいてやらうなど丶悪い考へが働いて居るのではないが、つい惰性的習慣に囚はれて、矢張り見ぬと氣持が悪るく、物足りないと云ふ感じがするのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼玉は生のポイントであるとつく〳〵私は感じた、魂の宿つて居る集點だ―、結燒點だ―。

私は常に人の眼玉を凝視て居る時に、其の人のマインドがスピリットが繪畫の樣に、種々の形を取つて浮んで現れて來る樣が面白くてたまらないのである、愛もブラウドも嫉妬も、悲しみも、皆其深い網膜の上に、反映の影が渦を卷いで現れて來る。

お覽なさい、あの血線を引いた、濁つた嫉妬の眼玉を、少しく上に釣り上つて恐ろしい光りを黄色く放つて居る虛榮高慢の眼玉を、我こそは美人なりけりと云ふ、普通女の持ちたい誇りを、あの筋肉の弛るんだ印象の明瞭でない顏に、呆然とした鈍い笑の中に、心のしどけなきを語つて居る眼玉、白い無教育な眼玉、オヽ厭だとお六さんを思つて私は身振ひした。

瑠璃の眼玉が懷しい、愛に光つた大きい瞳、崇高な、沈着いた、何處となしに重みのある茶色の眼玉、あゝ、それは逝かれた愛子先生のだつた、そして其眼玉は先生の性格の凡てを遺憾なく現して、王者の輝きを、かくや姫の樣に放つて居た。

私は種々な眼玉を見て、いろんな人の心を學ぶことが好きだつたが、尙一つ忘れられない眼玉が外にあつた。其は私の宅の金鋼の中に居る五羽の白い鳩の、一番大きい一つであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御覽なさい、片足を羽毛に隱して、眠つて居る神々しい姿を、あの天の乙女の使の樣に羽を廣げて脊伸した後て咽頭を「グウ〳〵」鳴らして紅葉の跡を砂の上に刻みつけて歩るく赤い脚を、けれども、麗かな朝日の光線(ひかり)をまともに受けて嬉しそうに眺めて居るあの丸い眼玉！　糸のやうに細い淡赤いピンクの上を白く小刻(こきざみ)の眼瞼で縁(ふち)取られて居る水晶の眼玉を、鞏膜の白い部分は圓い大きい瞳孔に壓し縮められて、僅かに兩端に其影を見せて居る。マア前からよく見て御覽なさい、そら、まるで底ひの知れない淵！　黒く澄んで動かないが、それを一寸横から見ると、ほら、まるで反對に眞茶に、底赤く光つて居るでしやう。金玉に漆(うるし)をかけたやうな光澤！　何んて美しい深い色彩のある眼なんでしやう。

クル〳〵と廻る眼玉を包んで上下から同時に閉づる淡絹の眼瞼――。

アゝ又開きましたよ、あの可愛いゝ眼玉！――赤い芙蓉の花はキット鳩の眼から咲いたんでしやう。

私は何よりも此の眼玉が好きなんです、利巧な、邪氣のない、おとなしい眼玉。

私は鳩を抱いて鈴やかな張りのある眼玉を見て居た時、鳩も私の眼を見て居ましたふと、小さい鳩の眼の奥に、あざやかに私の影を見出した時に、私は何とも云へない、嬉しい感じに打たれました。――完――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕祭禮

松本正生子

鉾も山げ通り過ぎた四條通り、いらいら蒸し暑い夏の日は、開き慣れぬ人の頭上に潑びせかゝる其鉦や大皷の騷がしい響のやうに、なやまさるゝあつさであつた。

夕祭禮を待つ人々は、一先づ家々に歸つて行く。其混雜も一通りてあい。成丈け控目な京都の人々は、此際の日丈けは、陽氣だつて浮つ調子になつて、上京の人も西陣邊の人も宇治の人も、伏見の人も、燥かるゝ樣なあつさに誘りたつて祇園町、御旅町、烏丸、と言つた樣な御祭禮の通る街の家並に、低う黑い城廓を作つたやうに何重となく群り立つ。

鉾や山は已う四條通りは過ぎたけれど、烏丸邊が丁度盛り、と見えてちやんちきちん、ちきちん、ちきちんと言つた風の囃の餘波がまだ何だか低う、迹に殘された人々の耳に響いてもゐるやうに嚙りついてゐる。夫れても人々は日中の熱天に干されてゐた忍耐と幾組となく押し付けられた鉾や山の其毒々しい濃厚な色彩とに、已う充分の飽滿を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感じてゐるから、やれやれと言つた調子に撒らばつて行く。

私は人通の全く疎に立つて行く迄、茫然として店に座り込んでゐた。

私の家は四條御旅町の丸襟といふ鹿の子屋である。

此日は勿論店を閉めて、町內は御神燈、幕で軒を飾つて、夜は屏風に建てつまる京風の奥ぶかい家の中は、龍行燈の幽艶なみやびさ。實際祭りとしての趣致は夜であるのだ。

全く疎らになり終はるといふ事は御旅町ではありやう筈がないのだが、でなきや水を打つにも挨り立つた門の中を掃除しやうにも手もつけられない。

私は往來の人の足を見詰めながら祭禮の通りすぎたあとの寂しさを感じて、縮緬の袖をしつとりと重ねて茫然りと坐つてゐた。

年を老つても、お祭りとなると矢張り陽氣めくものと見えて、母も襷がけの此何だかから沈つかない素ぶりを見せてお客の中に立ち混つていそいそとしてゐた。

「まあさん。夕祭禮の來る迄におみじまいしとお終いやあ。何しとおゐるのえ。」

と店の間へ屏風を立て直しに來た母はさう言ふと、

「まだ、早いわ。なんや知らんがくたぶれて了つはやうな氣がして。」

といふと、衝と立つて銀杏がへしの根がけの歪んだのを一寸なほして見た。母は小さな銀杏がへしに今朝結びなほしたのである。意氣好みの父はよく似合ふと言つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おつねさん來やはらしまへんな。來やはらてんのでしやらふか、あないに言ふておいたのに。」
と私の言ふのを、遮ぎる樣に母は、
「何に言ふとゐるのや。そない來て欲しのか。あんな人を。妙な　やないか。」
といふ。大方母は然う言ふだらふと思つたけれど、でも何となくおつねさんを待たれた心をつい言つて見たい氣になつたからであつた。母は屛風を一尺ばかり退込めたり出して見たりなぞしてゐた。思ふ樣に位置を得なかつたといふわけであらう。
「一寸と來ておくれやす。」
と奥の間に對つて父を呼んだ。父は直ぐやつて來た。七八人のお客を對手にした父は已う赤くなつて、上布帷の意氣な胸を披げて、容子つぽい襟付きをしてゐる。母を見ると小楊子を口に啣へて、
「何うするつもりだい。是れて奴ぢやないか。」
といふ。
「いきまへん。直しとくれやつしや。」
と母は実慳貪に言つて出て行つた。勝氣な、些細な事に無頓着な、大揚な母は孜々として父に努めるんぢやなかつた。夫れでもお人好の父は圓滿な家庭の人であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「是れて好いぢやないかね。」
と父は屏風を元の通りにして見て一間ほど離れて一寸眺めて見た。首を傾けて岸駒の山水を横ざまに見た。
「是れてええやらふ。」
と父はあてすつぽな言葉づかいて言つた。
「へえ、夫れでよろしおすわ。」
と私は言つた。父はふんふんと頷いて白博多の意氣な角帶を細く結んだ腰をふりながらふいと駒下駄をつつかけて表通へと出た。
私は其まま母を手傳ふといふ考へもなしに臺所へと行つた。お由さん、おつるさん、おかね、お千代、みな赤い襟がけにまめまめしく働いてゐる。鯛のお作身、茄子、胡瓜、鱧のつけやき鮎、鯉、夏の京料理は透明な硝子を若葉青葉に透かせるやうに美しい。私はおつるさんの初茸の叶物を手傳つてゐると、俄かに門口の方で人の聲がして、夫れがなと今一人女らしい聲音であつた。京の家の土間は臺所の流しから門の外まで見透かれる樣に續いてゐるものだ。おつるさんと私は直ぐ覗いて見た。紺地の華美な縞の衣物に白つぽい帶を占めてゐるのは若いおつねさんであつた。
「あ、おかみさん。來やはりましたて。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とおつるさんは直ぐ、意地の悪いおつるさんはさう嫋てる樣に言はなくつてもいゝのに、凭う母の方を向いていふ。存外母は濟まし込んだもので胡瓜の皮をむいてゐながら、無言てゐる。中々、感情を隱すに巧なは母のつねであつた。私はすぐ表の間へ行つた。

「おつねさんですか。」

と私は愛嬌よくいふ。おつねさんは大きな銀杏返しに華美な珠の根かけをかけて、其高い鼻にしわを倚せて和りと笑ひ乍ら、

「つい此向ふて這入つて見やうか、何うしやうかと迷つてましたつけ。だとお父樣がお見えになつたから、遂々見られちやつて。」

と言つて聲をあげて笑つた。白い額を其の帕て拭いてゐる。私は愛嬌なくもてなした。坐敷へ通りませうといふけれど、母がまだ挨拶をしに來ないので、おつねさんは遠慮してゐた。父も母へ氣を兼ねて、臺所に這入つたなり出て來ない。私は些ともてなしに困つた。

「ほんとにおあつ御座いますね。」

おつねさんは不安な心持ちを隱してにこ〳〵してゐる。おつねさんは三年前東京から父に連れられて京都へ來た人て、今は某大家の仲働に住み込んでゐる女てある。父には其おつねさんの父が隨分世話をやいたとか、父が我家へ入籍しない昔の話してあら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

う。おつねさんは自分の父の死後可なりな資産を減くして了ひつい京都などで働いて見る氣になつたのださうだ。

箸まめな父だから、夫れが本當の事か何うか分りやしないと母はいふ。私は優しげな順しい女らしいおつねさんを惡い人と想へない。お祭りになれば是非お遊びに入らしやいと一週間も以前から頻りと招待して置いた。夫れだからおつねさんは來たのである。父が以外お世話になつた人の娘といふ點から私は母に代つて同情しなければならない。

私は母を强てすゝめて挨拶させて、人々のゐない別の小座敷でもてなした。夫れておつねさんも嬉しがつて、夕祭禮も見て歸ると言つていそいそとしてゐた。父は決しておつねさんと話をしないでお客にばかり、相手になつてゐた。母がゐなければお客のおもてなしに、おつねさんの二あがりでも聞かして貰ふのにと私しは思つた。大方父もさう思つてゐやう。父は大分廻つてから眞赤な顏をして寢轉び乍ら口三味線で小うたを唄つてゐた。

夕祭禮が通るほど、日は暮れかかつた。凉しい風も吹いた。街々の灯もともりかゝつた。

夕餉はおつねさんも一座に加はつた。

「遠慮せんとおいとくれやすや。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と母は後を思つてかおつねさんにかういふと、

「いゝえ。ちつとも。」

さう言つておつねさんは笑がほする涼しい眼てある。

父はちらりとおつねさんを見て、和こりともせずに又俯いて了つた。私は又妙に寂しい心持がした。夫れはおつねさんが氣の毒だつたからではない、父の氣持ちを思つたのでは勿論ない。唯、此中で一番しやんしやんしてゐる母が、一番不安な位地にゐながら、怖ともしない樣に見せてゐる。夫れが私に寂しかつた。

夕祭禮が通るほど、街は人々のさゞめきが次第に繁くなつて行く。もう通るのかも知れない。

――完――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夜明の灯

原田琴子

少女子を涙の中におき給ふあはれ心の浮きてながるゝ
よしと見てわれは止まる人は皆果に急ぎぬ悔に急ぎぬ
いたましくのこる夜明の灯に似たり君がかたへにおかれたるわれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飯臺（ちやぶだい）を戸棚の前にとり出てゝ硯おきたるわが書齋かな

紫に紅にみどりに數多く帳たれまし悔の覗けば

泣くものと誰のあやまつ美しき戀のあふれておちたぎつわれ

戀人は氣遠になるを上もなき心のごとくあやまちて居ぬ

わが歌もよしと思ひぬ男らによからぬひゞきあたふと聞けば

泣く日にも歌はん日にもあはずして虫のごとくに聲たつるわれ

戀の灯をともさぬ家はあさましく人と人とのはぢき合ひする

みやび男の世をもとらむとまづ君が妻となりたるわが心かな

苦しかるわが家の舞臺のがれ來て君がみ膝に泣きて息つく

まづおのれ美しむ爲男の子らのさびしき中に交りたるかな

わが心さきにねむりぬ君を守る歌うたふまでのどかになれば

地の底に沈みゆく椅子をかしくも二つならべばをどりたつ椅子

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ますみ

うつろなる心となりてきゝ居たる芝居の太皷とほざかり行く。

夕ぐれの椎の大木にすずり泣く少女となりぬ十七にして

ちよ子

この夕べ歌思ひつゝふとつみし小さき草の名かたはみと云ふ。

友禪の鏡おほひに風吹きてよべ嫁ぎたる人のほつれ毛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕化粧

木内錠子

日が暮れるとお勝は血の道が起つたと云つて二階へ上つたなり、小女に枕と掻巻を出させて横になつた。

雨上りの若く晴れた空に白い夏の雲がフワリフワリと氣輕さうに飛んで、向ふの家の土藏へ明るく照り返す夕映の華やかな色を窓格子の間からマジ／＼眺めて居た。

亭主の信太は今日もどこそこに發句の運坐が有るとか云つて、晝飯の箸を置くなり出て行つて歸らない。

是が何も隱居仕事と云ふぢや有るまいし、店だつて漸つと仕入れの積込が濟んだばかりの態だのに……、ヤレ發句だ、謠曲だ、盆栽だ、爲る道樂にも事を缺いて、暇の遣り場に困つてる禿頭連れのする樣な事ばかり……少なくともお勝には斯う思はれた。

是ばかりではない、信太は又非常な信心狂で身延山とか四國詣りとかお伊勢さんだ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とか云つて、體に眼のあるなしに關はらず講中々々に交じつては眞黑くなつて旅烏を定めて歩き廻る。

「お前樣、少とは考えても御覧なね、是が樂隱居と云ふ柄ぢやなし、二人して斯う世を張つて居なければならない身が、今から殊勝らしい神信心や佛いぢりにくすぶり込んで了つてどうするのさ、馬鹿々々しい、後生を願ふのには少と早すぎるぢやないか」

一手に帳場を引受けてる女房のお勝がやつきとなつて、長煙管をはたき〳〵隨分こっぴどく談じつける事も有るが一向手答がない。

旅好きはまだしもとしても別に書畫骨董と云ふ餘計な道樂迄附いて廻るので乾度遠出をした歸り掛けには少なからぬ散財をして、利いた風な、眼も開いて居ぬ癖に一角掘出し物でもしたかなぞのすさまじい氣で飛んでもない物を背負ひ込まされて來る。

それでも佛性な御當人は一向いゝ氣なもの、空世辭の二つ三つも浴びせられるか、人の惡い奴に「どうも黒人はだして在らつしやる」なぞと飛んでもない眼識の程をかつぎ上げられると、煤掃きの胴上げ程にも感づかず、グッと納り却つて眼を細々の天狗鼻と來るから遣り切れない。

お勝は二十の時嫁入つて來て信太が二十七で始めて此神樂坂通りへ酒屋店を開いた當時から足掛け十二年と云ふもの連れ添つて居るが夫婦の間に子と云ふ者がない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

店を持つて四五年の間と云ふもの、二人して粉みじんになつて働いたゞけ有つて、メキメキ暖簾の色を揚げたが、此二三年以來四十にも滿たぬ男盛りを如何感づいたか、信太が急に發句や盆栽に凝り出してからと云ふもの、丁と店の方を構はなくなつたので、店は寂れ次第、置く雇人も置く雇人も尻が坐はらず、近處界隈のお得意も減切り減つて了（しま）つた。

利かぬ氣のお勝は此永い日の欠伸散じならまだ外にいくらも氣の利いた遊び樣があらうにと謠三昧、木鋏いぢりに日を暮らして居る男の呑氣さ加減につく／＼愛想が盡きて自分の亭主ながら癪でならなかつた。

「オイ、一寸行つて來る」と云つては暑いのに御苦勞樣な、殆んど毎日の樣に風流男を氣取つてか、指先で扇子をパチクリ／＼やりながら、細い鼻緒の突かけ下駄で店の上りばなから悠々出てゆく亭主の行く先きを、馬鹿々々しくつて問ふ氣にもならず、曲つてる羽織の脊筋をつい直してやる氣にもなれなかつた。戸の閉てられぬ世間の煩さい口の端は此夫婦の事を種々な噂に取り立てた。主人の信太が店の事に一向頓着しなくなつたのも一つには家の事が丸くしつくり行かないからだと云ふ、しつくり行かないと云つた處で何も別に氣詰りな舅姑が有らうではなし、謂はゞ惚れ合つた好いた同志が氣を合はせて働き合つててつち上げた身上だのに……。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お勝には男が有ると云ふ、否やさ飛んでもない淫亂女で家へ置く番頭と云ふ番頭小僧でも少しニキビの出來懸つた奴は見逃しつこなく何でも御座れ式に手の中へ丸め込んで了ふと云ふ話だ、前に「庄どん」と云ふ一寸男振りの惡くない番頭が永らく居た事が有つた。殊の外主婦さんの氣に入りて親身も及ばぬ程家の爲になつて働いた――それも其筈、其いきさつが有つたからだと跡で默頭かれただがお勝は庄どん一人ばかりに堪能しては居なかつた、まさかにと思つた牡丹餅面の吉と云ふ御用聞きにまで飴ん棒をしやぶらした。

越後生れの萬事に付けて辛棒強い庄どんは飽く迄もお勝を踏臺にして此身代の半分は濡手で位に都合よく定め込んで、お勝と云ふ可愛い奴は自分一人の持物の樣に慾と二道かけた甘い胸算用をもくろんで居たが、誰彼の差別ないお勝の淫奔さ加減と一つはどうやら折角の色男も鼻についたかしてとかく素氣ない仕組ばかり見せつけられるので、口惜し紛れと面當て半分、思ふ存分を旦那樣に逐一ぶちまけてのけた、無論、とうから出來て居た自分との關係もザラリとさらけ出して……

人は二本棒だとも云ふ、さうかと思ふと、いやあれてこそ男だ、生中家の中の恥を明るい世間へさらけ出しては暖簾の手前に係はるから、憎いも、口惜しいも、齒痒いも一切、腹の底へ疊み込んで了つて熊とシラを切るのだと呑み込み貌して乙な解釋する年寄も

有つた。

とにかく信太は「其様なふしだらな事は決して我家の内に有る可き道理がない」と云ひきつた丈は少くとも事實で有つた。

昨日、目で釣つた男を今日鼻で吹き飛ばす事を朝飯前位に心得てるお勝の仕打から割り出すと手切れともつかぬ僅か計りの金で、嫌になつた男を追拂ふ事が出來たのだから、結句厄介拂ひが出來た氣でさつぱりと濟し返つて。

「馬鹿らしい寢ちや有りやしない、何も女だからつてさ、そうピク／＼紙袋被せられた猫の様に後退りばかりしてちや壽命が續きやしない」氣嵩なお勝はヂリ〳〵と眉尻を釣らして斯う口走つたが、ふと庄吉の事を考へ出すと萬更いゝ心持もしなかつた。

庄吉ばかりではない、根が厭きつぽく浮氣性に出來てるお勝は如何に惚れ込んだ男でも決して長持はしなかつた。少しでも珍らしいの新らしいのと、變り變つて目の前に顯はれて來る男を好奇心の眼顏で追かけ、手當り次第に撫で切りを試みたので中に隨分自棄半分、甚い使ひ込みをして帳尻に思ひ切つた大穴を開かしたり、晦日に掛け先きを集めた揚句隨徳寺を定めたりした手合も珍らしくはなかつた。

……其處へ行くと庄吉は仕舞ひまでおとなしく目を閉ぢて居た、夜の明けない先きから起きて寢る迄草鞋も解かずに店の爲を思つて働いた――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お勝は悩ましい頭腦の中から妙に庄吉の事ばかり思ひ浮べられてならなかつた無類の親切者だつた事、執拗かつた代りに情の細かゝつた事、物越しに云ふに云はれぬ頬母し氣な處があつて、人をなつかせる赤い少さい唇をもつて居た、色は黒いが、木彫の人形を見る樣な形のいゝ鼻附、俳優にしても彼程の素顔を持つたものは恐らくあるまいとさゝ一時は思はれた、其男振りなら氣前ならいゝ事づくめを數へ立てゝ美しい庄吉の面影を描かうとしたが、漸々考へれば考へる程、矢張跡ましい感じが先きへ立つて容易に空想の面影は成り立たない、じつと物を詰詰る時物欲しさうに卑しく光る目、硬い大きな手の平、男の樣にもなく思ひ切りの惡いメソ〳〵した性分、どう思つても懷しい處ではない、いくらいゝ着物だつて、一度は氣に入つた頭髮の道具だつて古くなりや矢張あきる、同じ事だ、こんな風に考へて來ると、結句、今帳場を預けてある學生上りだと自稱するハイカラ頭髮の近眼の方がまだしも増しの樣にも思はれた。

女中が下から臺洋燈を持つて上つて來たが、今少し、じつと薄暗がりで取りとめもつかぬ思ひに耽つて居たかつたので、

「あかりなんて要らない、目ばかりキラ〳〵して餘計頭痛がする、そつちへ持つてつとくれ」突然に邪慳な浴せやうをしたので、

「では、御飯は上らないんですか」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山出しの物馴れない丈けにオッ〳〵して階子段を下りかけながら痛い處にても障る樣にそつと云ひ出す、

「何だつて？　上らないんですかすかと點から定めつける奴があるかい、如何ですかと云ふもんだよ、在鄕と違つて東京へ來たら少と物云ひにも氣を付けな」

癇癪聲でビシ〳〵がなり付けるかと思ふと「要らない〳〵、御膳なんかつて云ひ出された丈けでも胸が惡くなる」

子供が馱々をこねる樣に身を揉んで九髷の仇つぽい頭髮をクルリと壁へ向けて了つた。

裾高に端折つた紺絞りの下から毒々しくドス赤い湯文字があらはれて居るのと、丸太の樣に固く太つた短い足とが妙に神經に障つてあの薄ぎたない下女の手で煮られた惣菜の唐茄子など煮上る匂ひをかゞせられるさへ胸のムカつきさうな氣がした。

お勝はそつと暗い壁へ自分の白く細い兩手を並べて見て、子供が氣に入りの玩具でも見る時の樣にニッコリ得意さうな微笑を洩らした。殆んど其と同時に朝夕向ふ姿見へ映る自分のあでやかな顏と纖細な姿とを思ひ浮べた。

子を生んだ事が無いので何時迄も若い、赤い鹿の子の手柄を懸けても可笑しくはないといつも髮結がほめる、チャラッポコが半分と積つても滿更嬉しくないこともない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分の體の中でもお勝は殊に、凄い程澄み切つた目が一番好きなのだ、どうして斯う奇麗なんだらうと時々は自分ながら自分の目に惚れ〲して濃くふつさりした睫毛を嬌しく思ふ時もある、斯うして横になつてながらもお勝は自分の美しい事を自分で考へて見るのが一番面白い、男なぞの事はどうでも構はない、只美しい自分に引付けられて我も我もと蝶の花に競ひ寄るやうに、目に見えない蜘蛛の網が掛つて居るとも知らず、自分から釣られに來るのが何より嬉しく誇りを感ずるので有つた、ぞして端から端へと果物の新鮮しい汁を吸ふ樣に嚙んでは捨て、しやぶつては拋り出しゝて行くのが愉快で堪らない、男が自分と云ふ目的物を外した爲に失望したり、口惜しがつたりして自團太踏むのも底氣味がいゝ、庄吉の樣な執念深い男の恨みを受けても咒はれても怖ろしいとも何とも思はなかつた。美しい女が斯うした場合に受けねばならぬ當然の報いの樣に心得てるので……

○

「お主婦さん、何だねェ、一體全體此樣な薄暗い處へもぐり込んで……之ぢやア全で押籠にでも逢つてるやうぢやないか、」

暗がりから油切つた重い身體をノシ〲と引づる樣に、案内もなく上つて來て、突然無遠慮に聲を懸けた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婆様は平常から心安くして居る隣りの者で、貸家の差配をしたり、内職に碁會所の看板を出しといたり、曖昧な素人下宿に迄、脱け目なく手を延して居るしたゝか者の後家である。

「だつて頭痛がしてならないんだもの」

纖細な手を輕く額に當てゝ甘へる様な身振で云ふ。

「一寸、勝ちやん」

婆様は自分の娘かなぞの氣でお勝の事を平常から斯う呼ぶのだ、するとお勝も亦つい其尻尾に付いて「お茶が入つたから小母様」「お向ふから五目鮨を貰つたから小母様」と小母様づくめて飛んだ心安立てになつて居る。

女だてらに婆様は帷巾の腕を捲つて、枕元ににじりよりながら、聲を低めて、

「ソラ、此間勝ちやんがお云ひだつたらう、なあに？なんてとぼけたつて知らないよ、麿蘇する年おちやなし、あのソレ、早稻田の學生様、家の二階の……、いゝ加減におしつたら、散々人を食つてる癖に……、そつとさぐりを入れて見たら、あゝへら堅そうに見えても案外なのだよ、今夜は皆外の奴を寄席へでもやつちまふから、都合を見てお出でゞないか三人水入らずで面白く飲まうよ、起きといでつたら、頭痛なんか忽ち愈つちまはアね勝ちやん、何だね、其様な寢ぼけた様な顔をしてさ、確りおしなね、見ともないよ、本當に世話

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の焼ける子つちやありやしない、アヽ〳〵私がもう五つ六つ若くつて、そして責めて勝ちやんの四半分程の容量が有つて御覧、默つて指をしやぶちや居ないよ、此御禮にはまさか、鰻丼や天麩羅位で濟ましやしまい、實際すまされるもんかね、確りお頼ん申ます、隨分氣の利いたお使者の寸法さ！」

婆様は皺の間からにじみ出る額の油汗を拭き〳〵黒豆の様な丸髷を光らして歸つて行つた。

お勝はやゝしばらく枕に附伏して考へ込んで居たが、漸々起き出して物憂そうに姿見の前にいざりよつて、しどけなくなつた衣紋を繕ひながら、暗い鏡の面に浮き出した自分の面の少し青褪めて見えるのも淋し味あつて嬉しく染々見とれながら髮を撫で付けて居た。

○

着物も一番氣に入つてる大柄な明石縮みのを簞笥の底から引づり出して、態と伊達を見せた素肌に着込み、派手な絽の帶を若々しく胸高に締めて隣りの勝手口からそつと跋𨄔をくゞつて駒下駄の音を忍ばせた。

堀井戶一つを隔てに取つた自分の家の臺所では草鞋ばきのまんま、店の若い者が框に腰かけてせわしない夕飯の食べようをして居る。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其晩はお勝も可成醉つてゝ十一時過ぎに歸つて來た。

信太は歸つて來て居たが、蒸暑く寢苦しい晩なので、寢床へも這入らず、下座敷の椽側で膝の上に運坐の巻を擴げながら罪のない顔をして居る。

「只今」

甘える様な艶かしい聲をかけたが、妙に氣が臆せるのでピッタリ傍に坐つたまゝ默つて居た何を考へ込んで居るんだ面白い話でもせんか」

信太は不思議さうに珍らしく落付いて居る妻の様子を見て居たが、氣遣はし氣に斯う云つた語氣は相變らず優しかつた。

穏やかな目、何の蟠りも胸にない夫の仕打に逢ふとつい堪らなくもろい氣になつて

「あのお隣の小母さんが急ぎの仕事を助けてくれと云はれたのでつい……此様に晩くなつちやつて……」

自分で弱いとは知りつゝ、つい口から出任せを並べて了つた。

「何を云つてるんだ、何も其様な事を聞いてるんぢやない」

信太は他愛のない事を他愛のない調子で云つて無邪氣に笑つた。

洋燈を避けた暗い椽側に凉み提灯の水の様なあかりを浴びながら、薄い肩をすぼめてお勝は淋しそうに賴りない目元で花ござの模様ばかり見詰めて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

女共や若い者が寢たのは何時も定りの十時で有つたが、夫婦は枕についても寢ぐるしいので蚊帳へ入らず漸々夜を更し、一時近くになつて漸く眠りに就いた。

ついとろ〱と寢ついたか寢つかないに、番頭頭のハイカラ頭髪が慌しく駈けて來て、

「若々〱、旦那々々、お主婦さん」

ふるえ聲て押付ける樣に重く呼んだ。

信太が物も云はず、はね起ると、

「何だか知りませんが、今太郎どんが便所場へ起きると物置の方で變な物音がしたつてんて鼠ぢやなし適切人の足音だつて申すんですが……」

小僧の太郎もガタ〱しながら顚狂な目を見張つて障子の外に立つて居る。

「何しろ、女共を起すな、寢て居る者は成丈打遣つてをけ、無暗と騷ぎ出すから……」

口早に云つて信太はセカ〱蚊張を出ると、

「お前樣、ヒヨツト怪我でもすると詰らないぢやないか」

お勝は胸をオド〱させながら袂を押へたが三人はドシ〱開きながしに椽側傳ひを物置の方へ行つた樣子だ、氣の早い若者はもう捉へた氣かなぞてほこりだらけな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高張提灯を棚から下したり、ごどなわを用意したりして居る。

○

然し、結句其晩は、騒ぎ丈けが草臥儲けで何の事もなく濟んだ。竊盜で有つたか、但しは火附けで有つたか、

三人が飛び出してつた時はもう影も形も見えなかつたと云ふ、然し慌て臭つて逃げ出して行く時、戶袋にでも打つかつたらしく、馬鹿にひどい物音がした。

曲者は逃げたと云ふので怖々ながら太郎が往來へ出て見ると、半纒を頭からスッポリ被つた大男が消えかゝつた瓦斯燈の下をそれて向ふの路地の暗へ忍び込んだと云ふ。其尾について瓢輕な(ひよつとこ)と云ふ仇名の小僧が、「おそろしい怖い目で、丸で此春明治座で見た高麗藏の油坊主みたいだ」と自分が見て來た樣に話す。

其凄い目と云ふのがお勝にはどうしても庄吉の樣にしか思はれならない、元より自分は見もせず、何故と云ふ證據も手づるもあるのではないけれど、只何となく庄吉であるかの樣に感じられてならぬ。

食べるに困つて來て物取りにでも入つたか、又は……彼樣な妙に執念深い蛇の樣な男丈けに自分を恨んで……、お勝はもう、くらやみに目を開いて其さきを想像する勇氣がなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あれんばかりの事を根に葉に持つて、弱い女を恨むなら、祟るも宜からう、取殺して呉れてもいゝ、取殺すなら殺して見ろ、男らしくもない物置になぞコソ〳〵忍び込むなんて……、拾犬見たいに、何だ！見共ないぢやないか、もつと威張つて來い、店から、店から大股に入つて來て立派に殺すなら殺せ、面白い、私もお勝だ、見事殺されてやる、」

胸に餘る弱味が自分と自分に斯う力味を云はせたが矢張神經がたかぶつて寢就かれない側に枕を並べて居る信太は直ぐ其まゝ寢入つて、穩やかないびきの聲さへ漂はして居る。

眠るとは覺め覺めてはウト〳〵する、ウト〳〵するかと思ふとすぐ怖ろしい夢に襲はれてハツト目を開く、閉ぶると光景は破船した船底で汚ならしい旅の女が自分の側に倒れ伏して居る、抱き起さうとすると其女は死んでるので口からおそろしく毒血を嘔いて、顔は幽靈の樣に蒼い、キャッと聲に出して思はず手を離すと、自分の大事な着物の袖から帶から血糊がベツトリと染みついて了つた　と思ふと昔娘の時分芝居で見た淸玄の樣にやつれた凄い男が土の樣な貌色をしてムクリと自分の枕許に座つて居る鼠色の衣服、鼠色の帶、毛虫然とした眉毛、其下から二つの眼ばかりギラ〳〵狼の樣に光つて居る、庄吉だ！〳〵、お勝は怖ろしさにふるえ上つて枕許の有明洋燈を點さうとしたが、點したら暗い障子に今見た夢の幻が浮き出しさうで滅多にマッチを擦る氣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なれにもなれなかつた。

冷汗のにじんだ體を固くして、前髪を枕紙にすりつけたなり、お勝は徒らに夜明けばかり待たれた。

翌日半日と云ふものは半病人の形で帳場へも出ず、誰が何と云つても口一つきかず、氣脱けのした樣に蒼ざめた顏をして奧に座つて居たが遂に午後から土藏前の小部屋に床を敷いて寢込んで了つた。

○

其後庄吉の姿を我も見た〳〵と店では大評判である

彼の晩變な事が有つてからと云ふものお勝は耳の端で名を云はれるさへ空恐しい樣に思つて、當分隣の家へも滅多に足踏みをしなかつたが、漸々月日にほとぼりがさまされてゆくと、長い夢からさめた樣に矢張もとのはしやいだお勝に戻つて芝居、寄席緣日と目に立つ形裝をして盛んに押歩く。

或者は庄吉が乞食の樣なボロをさげて居たと話すし、或者は身奇麗な風をして神樂坂邊りの藝妓屋町をうろついて居たとも云ふ、兎に角、始終お勝の家の近所をまごついて居るには違ひない。

お勝はもう氣味が惡いと云ふより小芝居かなぞでよく見る仕掛の見え透いた化物

が宙に迷つてる滑稽さを思ひ出してむしろ此頃ではをかしいと思ふ様になつた。男の未練、愚痴總てそんなものはお勝の耳に蚊程のひゞきも與へなかつた。

店の者はもう庄吉の名を云はないて、其凄く鋭どい眼を鷲の眼々々と云ひあつては笑つて居る。

お勝は日にまし若く妖艶になつて行く柳の綠より青い三日月眉ぬける程白い襟足、此頃ではずつと向きを換へて、洗ひ髮を藝妓風の細い銀杏返しにして奴元結にくすんだ好みが容姿のいゝ丈けに餘計引立つて、素肌を自慢の大辯慶の浴衣と共に一段男の心をそゝつて居る。——完——

（舊作）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高原の秋

らいてう

こんな樂しい寂しさがまたとあらうか、

私の全身(からだ)がいつかしらたつた一つの團圓の心になつて天空を抱き入れて了つた。

高く、高く、また高く、顔の上に、露草色の濃淡もなく、澄み渡る秋晴の朝空は無底の大海のやうに深いけれど、其深さには飽迄明るい輝きを含んで、視界のきはみ、羊毛の一筋ほどの白雲さへ浮ばぬ。

私は先刻から誰に障げられることもなく、高原の谿を埋める眞葛の廣葉の中に、伸び、伸びと仰臥して、心行くばかり、碧空を眺め入つてゐるのである。

今朝、温泉宿(ゆのやど)を出た時は、ほの白い曉空は水のやうに、果てしもなく流れてまだ背後(うしろ)の東山から日の出るには間があつた。もう三里近くは露を亂して來たに相違ない。いつか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黄金色の美しい光は、水晶を解して湛へたやうな、浄明な純粋な乾燥した凸半珠の大氣の中に漲り溢れて居る。

私は日觀を忘れて居た。

この信濃の旅人となつた其日から、怠らなかつた日觀を今朝全然忘れて居た。けれど、思へ。今かうして眞直に空の奥へと高く眼を注いで居るのは、矢張り自分の心元に鉛錘を投じて、測つても測つても、量り切れない、後から後から千百の國土が發見される、其魂の秘密の深淵を測量してゐるのである。この間に私の神經の顫動が沈まり、眞の生命が芽を吹いて、伸び、眞の自己が孚まれて、大きくなつて行くに日觀と何の變りがあらうぞ。往昔希臘のピタゴラス學派では朝毎に天を眺めよと訓へたさうだ。否々、私は白晝を忘れ、太陽を離れたことはない。少くとも靜平な時も、動亂の時も、夜も、晝も我が太陽と歩調を合せやうと努めて來た。

四邊は物忘れでもしたやうな靜寂さ。

開闢以來汽車、電車、自動車の響はもとより、人力車の音にさへまだ一度も動搖させられたことのない空氣は酸っぱいやうな、どこか濕つぽいやうな、冷たい、青い匂ひを籠めて何となく心を引締める。

蟲の聲は絶えず小さな玉を色々に轉ばして居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蟲の聲を外にしてもしこの雰圍氣に波動を傳へるものがあるとすれば、梢を渡る風の音か、鳥の羽音か、落葉の私語か、杣人や、炭燒く男女の氣長さうな跫音位なものであらう。

しばらくして靜に起きた………紅葉の錆びた花が袖を掠めてほろ／＼と徑にこぼれる。

眼を西方に放てば、遠く信飛國境の大屛風・日本北アルプスの連嶺はずつきりと虚空に刻み出されて、其巓の一つ、一つざくりと刳つた斧鑿の痕まで見えるため、いつもよりはものの何里も近寄つたやうに思はれる。

天地に塞がる大傾斜、大谿谷、無限から、無限に、無邊無際を畝ねる空線、是等はもうそれながらの自然が絕妙不巧の一大藝術で、萬人の心を威壓し、驚異と、崇高と、莊嚴と、畏敬とを、無言にして日に、日に新に強ねば止まぬ。何たる印象強き性格であらう。惡魔か、あらず、神人か、はた超人か。人格進化のクライマックスに達せる高僧、善知識等が、沈默靜座の面前に幾度か立つた自分もまだ嘗てこれほど赤裸々な威嚴に打たれたことはない。

太初、茫寞の山野に住んだ原人は何等のこざかしき思念を挾むこともなしに日輪、山岳、大洋、大河、森林などに對して我知らず跪いたのである、其自然崇拜時代の嚴肅な、敬虔な人間本來の純粹相をこの虚僞な、曖昧なまやかし多き今日の世にまだ多少でも失はず

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して生きてゐられた自分を、私は心に謝さないでどうして居られやう。

それにしても呱々の聲をあげて、まづ第一に無垢な頭腦に印象すべくこの山岳を有つてゐる信州人は何んて幸福な人、自然から受けた恩惠の豊かな人であらう。仰ぎ見るものの一つもない關東平野――しかも東京の眞中に靖國神社を唯一の遊び場として育つた自分………幼稚園の歸途をあの馬場(今とは違つて、まだ大村氏の銅像もなく、一面蓬々とした雜草て、木柵が取廻されて居た。)の中を、蟋斯を追ひかけたり、電氣燈に集る大きな甲蟲を玩具にしたり、花を採つて、巡査さんに言付けるぞと園丁に嚇されたり、青銅の大華表を此の世の一番大きなもの位に思つて居た自分………ああ、若しこの高原の土に生れ、山靈と默契の中に育つたのなら、も少し偉大な人間として今生きて居はしまいか………。

私は今、山麓の徑を河原に沿つて爪先下りに歩いてゐるのであつた。

昨日の冷たい雨は又山々に雪を齎した。

最後列の高い峯々は頂から絹絲を振亂したやうに、縱谷に雪を疊んで、純白に、灰白に、銀白に、或は眞珠色に輝く。中にも乘鞍ヶ岳の斑雪は碧空を劃して鮮かに磨き立てられて居る。

例の槍ヶ岳は常念の後から僅に現はす鋭利な花崗の穗先に大空を突拔いて、天帝を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

威嚇するものゝやうだ――大膽不敵の一騎打の荒武者よ。だが、松本平に灰雨を降らした、かの憤怒の燒ヶ岳は今日はいかにも香氣さうに幟のやうな烟柱を眞直に立てゝ碧空を白く二分した末はやゝ横ざまに靡いて、高く消える。けれど、上高地温泉あたりからでも眺めやうものなら、戰慄せずには居られないやうな、猛烈な噴烟に天を焦し、萬目死に閉ぢて、四邊は緑の一點もなく、髑髏のやうな枯木立は無限の恨を天風に訴へ、見るから、荒涼、凄慘な光景であらう。夜は黑闇々の虚空に時ならぬ大紅蓮の焰の花も咲かせよう。

毛立て天鵞絨のやうに滑かな、赭色の艶肌に針葉樹の森を暗藍に煙らせた前列の山々は、護衞兵のやうに肩幅廣く、或は狹く、跨を開き裾た捌いて、簇々と膝下に參ずる。

秋の空氣は圓味がない。煙が利かない。赤禿のあからさまに過ぎるあたりは强情我慢の相を示しては居るが、犀牛の肋骨（あばら）のやうに山骨の露出したのは、ともすれば雪の白縞を欺く。

近い山々の懷から青々と長閑に立昇る三筋の細烟は炭を燒いて居るのであらう

何所を見ても覺醒の眼をぱつちりと見開いて、夢見るものゝ一つもない、澄徹した明け放しの光景は、自分の腹綿を一つ、一つ取り出して眼の前にずらりと羅列したやうな大悟の後の心好さてある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さら〳〵、さらッと何處かで音がする。

水の音ではない、風の音でもない。あゝ、秋の聲、秋の聲だ。

私は思はず立止つて、河原の方へ耳傾けた。

河原には流れがない。山林濫伐のため、一面海のやうに灰色の大砂利、小砂利は高く、低く、連つて、仙人の手窪に湛えたやうな、鋼色の秋水が圓くそこ、かしかに光るばかり。本來の嚴格な形相を削磨された大石は四つ五つ。圓滿滑脱の老人のやうな顏付でこちらをぢつと見てゐる。其間を河原蓬や、河原母子が隙間もなく生々延びて、白々と、いかにも柔らかさう。あの物寂しい幽かな秋の聲はこゝから來たものらしい。風もないに河の秘密を囁きあふのであらう。今少し季節が早かつたならばこの沒彩色の中に河原撫子の紅が暖い血潮の幾滴かを點じてゐたであらうに。

河原に沿つて、柳や、雜木の茂みがある。黄葉は舞ひながら、靜かに落ちる、又落ちる……

……見よ、この細い一葉、一葉にも大自然は決して極印を忘れてゐない。

大木が路を塞いでゐる、山荒の時のが其儘になつてゐるのであらう。乘越えて行く。

對岸は山又山に圍はれた中のかなりな平野である。濶葉の林叢は丘に燃え初て、紅のはた紫の焔に榮えある秋を誇り、時に深緑の森と手に手をとつて半圓を作る。野は大方耕地になつてゐるが、其間に起伏する小丘は高いのは赤松の幼樹、低いのは櫟林や、桑畑、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蕎麥畑、ともすれば稲田もあつて、様々に劃せられた色彩の遠望は云ひやうもない。自然がありとあらゆる色彩を見せたさに其大きな繪具箱から生の儘のをボタボタと落したやうだ。其間に小さな農家が點々と散在する、いかにも山國の特色をよく發揮してゐる。比較的大きな高い、何の風趣もない、白堊の畫室に三つ四つ二つ穿たれた暗い方形の小窓の暗示的なのが妙に目を牽く。

路は花野にかゝる。

高原の露はまた格別である。炎天の太陽の下にありながら、鷄兒腸(よめな)、紺菊、白山菊、地楡(われもかう)、おとぎり草其他名も知れぬ花草の上に、圓い、長い無數の白玉を綴つて、七彩にきら〳〵と光る。私は目映ゆさに思はず懷に手を入れたけれど、例の煙眼鏡はなかつた。今朝荷車につけたあの荷物の中に紛れ込んで行つたと見えて。

有るか無きかの燈心蜻蛉は芥子ばかりな二粒のタルキッシュを頭に點じて、花から花へ無心に飛び移る。足元からは蝗斯(ばつた)が餘程吃驚したらしく、無作法に跳ね上る。山腹の緩勾配の山薊の險相な紅紫の針の塊に近く、しゝうど、男郎花などの繖形の花叢がくつきりと浮き上つて、白く漂ふ。風に光る崖の花すきの白銀はいかにも柔かさうな。所嫌はず茂る雜草の莖と云はず、葉と云はず、花にまでもねなしかづらの長い紐が執念に絡み

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

付いたあたりは黄ばんで見える。
けれどもう野も花も錆びた。
黒紫に熟しきつた山葡萄の房の先から一滴の雫が自からにぽたりと、
ああ可愛い栗鼠の圓い眼があの葉蔭からもしや覗いて居たら………
ああれ、あれ思ひがけない草の中に龍膽が、たつた一つの龍膽が、ずつと一本抜け出して、日を好む單純な、鐸狀の花は同じ色の天に口を開いて居る。この純粋な碧色は屹度秋晴の大空から色素をとつて、日本アルプスの萬年雪が反射する白雲母のやうな光に幾度か洗つたに相違ない。此國の自然畫家が自分は龍膽を描いてその背景に白妙の日本アルプスの遠望を現したいと云つたのも頷かれる。
私は顧みて、西の空を仰いだ。空には白い雲があつた、連嶺は秋の薄霞にいくらか遠ざけられたが、乘鞍の斑雪は一段の輝を添へた。
ああ、高嶺の萬年雪！ 私の胸は忽ち躍つた。………矢張り私は雪て死にたい、日本アルプスの雪て――今迄見たありとあらゆるものゝ中で、一番印象の深い、強い、暗示的な、神秘的な、いつ見ても清新て、自由て、魔力のある日本アルプスの其頂のあの神聖な萬年雪て。
雪は私の生命である。ラスキンはもしアルプスて死んだら雪の中に葬つてくれと云

つたさうだ。けれど、私は人手にかゝつて葬つて貰いたくもたい。卑しき自愛や、欲情や、苦悶、動搖、悲愁、疲勞、老衰、死、さま〳〵な影に濁つた人間の眼にも觸れずに其儘雪を褥に寂滅の谿間に靜やかに、安らかに眠りたい。げに哲學的生涯とは生なき死、死なき生に對する不斷の冥想ではあるまいか——

私は寂滅の谿間に萬年雪を褥に靜やかに、安らかに眠つてゐる。

三千年の長い〳〵Devachanの眞晝の夜が續く。

私は眞晝の夜の泉の中に浸り、浸つて、飽くことも知らず、乳汁を飲んで、日に日に肥つて行く。

もう肥るだけ肥つて、熟すだけ熟しゝ、ひゝわれるばかり、——

ふと高山性の強い光線の矢が痛いほど身を刺すかとばちつと大きな眼を開いて見ると、すぐ頭の上は透き通るやうな蒼穹だ。銀白に輝く視野の限り、卷雲の大海原は脚下に續く。十倍大の太陽は眼の前、手にとるほどの近さである。私は射かゝる光の目眩ゆさに眼を擦り、擦り自分の身體（からだ）を見る、(身體を見ると云つても頸を振ぢるやうな無理はしない、私の魂は身體から離れて、傍に立つて居るのだから。)と、不思議なるかな。一面、純白な羽毛で蔽はれて居る、つく〴〵見れば雷鳥だ。這松の中に巣くひ、千古無人の境域を默々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

として飛び交ふかの雷鳥だ。

どうかと、まづ一鼓翼して、さて大空へと飛んで見ると、身體の輕さ、空虚(うつろ)で出來て居ると云つてもまだ重い。

私は太陽の周圍(ぐるり)を三度廻つた。――

さうだ、さうだ、乘鞍へ、乘鞍へ。

あの胡蝶のやうな斑雪は私の經帷子――高原の一雨毎にふうわりと厚く蔽いかゝる經帷子だ。

頂上には火口湖(五の池)の底まで澄み切つた眼が飽迄冷かに八峯環座の眼蓋の奥から見て居る筈だ。太初、燃えて、狂つて、火の太柱を天に冲したその噴火口が――

ああ、或時は極熱であれ、又或時は極寒であれ。

神の口から吐出されたやうな生温き人よ、不純な人、よ嬌飾な人よ、汝はまた君が王國に縁(ゆかり)なきものと諦めよ。

さうだ、さうだ、乘鞍へ、乘鞍へ。

はさと小枝に面を拂はれて、思はず反身に二歩すさつた。其儘私はしばらく其所に突立つて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何故私の眼からはいつまでも〳〵熱い涙が流れるのであらう源は地の底か、そもこの熱、この力は何處からくるのであらう。

と見れば其所彼所に山櫨かとと思はれる幹も枝もない幼樹は羽狀の葉のみを直に大地から拔き出して唐紅に焰の舌かと燃え上る。

あたりには雜木林が多い。乾枯びた鳶色の縮葉が捲返つて震ひながら、でも、まだ容易に枝を離れかねてゐる櫟林、其奧の奧を目白鳥が枝から枝に身輕に潜り拔ける。柴刈が、落葉掻てでも居るのであらう、姿は見えないが、何處かでがさごそと音がする。

路は多少の高低をなして左に、左に曲折する。

日あたりのいゝ斜面から路にかけて、曉の星のこぼれたやうな白山菊が一面に咲き匂つて居る處に出た。

私は又何の分別もなく、其中に横はつてゐる。

清香は晶明の空氣に溶けて四邊に浮動した、求めないのに花は自から搖いで頰に觸れる。

小さな太陽をとりまいて舌狀の細い眞白な手をやさしく空に伸す白山菊よ、私はお前の葉に色づける無數の赤錆園までがすきですきで捨てられないのだ。私が御前の中にもぐり込んで、お前の秘密を、ずつかり知り盡した時乾度私とお前とは大自然の奧底

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にはびこる一つ根に咲いた姉妹の花だと云ふことと解するに相違ない。
頭の上で赤蜻蛉が渦を巻く。無色の薄い翅を金銀に光らせながら、さま〲の綾を描いては、描いては渦を巻く。
山裏の岨路を縫つて來た馱馬は十歩のあたりをとつか〲と引かれ、引かれて下りて行く。背負つた炭俵が落ち相た。
私は又歩き出す。
大きな河原に渡された平板の長橋を先刻の馱馬が夢中のもの丶やうに通る。橋の上に立つて上流を眺めると、何所までも灰色に展けてゐた砂利河原の次第に兩岸が寄合ふあたりは大石累々たる石淡で、其間を石に堰かれ、石を越え、幾筋かに分岐しつ丶、泡花を咲かせつ、散らしら丶、白々と流れ落ちる淸湍が見られるが、水は極めて少ないらしい。それも其筈、前面に峙つ山々は大方枯色の兀山で、白つちやけた斷崖をそこにも、こ丶にも剝出して居る。殊に赤禿に日の照る截斷面は美人の玉の頰にむざと燒鏝でも押付けたやうな殘忍酷薄な、强烈な感じを與へる。いづれ濫伐の結果であらうが、出水の壯觀は思ひやられる。
目を掠めて、河原の石でも飛んだかと、鳥が啼かすに立つた。
橋下を見ると大石がいくつも轉がつて居る。仕事をして居た人足は鶴嘴の手を休め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て無意味な眼で私を見送つた。

河原に別れて田圃中には入る。

蕎麥畑が所々に白くくつきりと野を劃して、蜜蜂の眠氣(ねむけ)を促すやうな唸り聲が絶えず聞える。水車小屋では用なき所に徒らに神經の過敏になつて行く文明の人達を嘲笑ふやうに昔も、今も、夜も、晝も、大愚、大愚と繰返して居る。

繭莚を干し並べた二十戸あまりの小村を過ぎ、とある小山に突當る、其裾を半周して、櫟林と桑畑のだらだら坂を下り、左に折れれば一群の家根が向ふの山裾にちよんぼりと浮き出る。

其所が養鯉所である。

戸數僅に三、五、郵便配達夫は朝一回しか來ない、ポストとも湯屋も何もないところ。四周山で取圍まれた大池で鯉を飼養するやうになつて以來出來た家で、皆まだ新しいのだとか。

でも、あたりは大方鋤がはいつて、日に照らされた、田の面は黄に焦け、よく實つた垂穗には同じ色の蝗(いなご)が止つて居る。稻の香は空中に滿ち、あのお喋(しやべ)りの雀さへ無言で籾を拾ふ眞晝の靜けさを、田水は細々と、鮮かな音たてゝ落ちる。今、畦を横切つた黒い小動物は……野鼠であらう。早稻の刈田の中を鳥冠を自慢の眞白な逞ましい雄鷄が物體らしく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

先に立つて歩く、と二羽の雌鷄が後に續く。路傍の土の中にむつと蹲つて、羽蟲に時々身體を震はせてゐるのもある。

何所からか小綺麗な、小さな垂れ耳の白犬がのそ〳〵と蹤いて來る。いかにも眠さうな眼付だから、一寸口笛を吹いて見ると、すぐ堅さうな細い尾をふつた頸環も何もないが、飼犬と見えて。窪の溜水のあたりを家鴨の一列が大儀さうに駈けてゆく。其後姿をぢつと見詰めて居ると、何だか面白可笑しくて堪らないことでもあつて居ても立つても居られないので、あゝして皆んな身重の女の眞似をして、ふざけてゐるのぢやないかとおかしい。

山腹に數本の柿の木がある。見よ、汐垂れ加減の霜葉の中の鮮紅の柿の實は信濃の秋の象徵ではないか。一番高い木の梢頭に大きな鳥の死骸が竹棹の尖端にぶら下つてゐる。私は立ち止つて、其實を數へた。

柿！柿！柿！柿！柿！柿！……

此秋晴の山畑で、北アルプスに沈む入目のやうな美しい柿の實に一つ、一つ自分の魂を入れて居る私はまあ何と幸なものであらう。

詩もいらない。歌もいらない。

何所かで折々鍬の音がする。盲目縞の雪袴を穿いた、編笠被りの女が二人同じ盲目縞

の手甲の手を甲斐々々しく働かせて居る。

田圃中の一本路を左に折れると、栂の生垣を周らした農家に突當る。門前に聳り立つ二本の欅の大樹は青空を背景に小枝々々をすつきりとすかせ、半ば振り落した黄葉は日を照り返して、立派なそれでゐて徹底した美を示して居る。

眞直に門を入ると、納屋や厩が並んで居る。柵の上から顏だけを出した黒馬の、長大な顏に釣合ふ程の大きな、しかも優しい眼に見送られて、私は暗い廣さうな土間の一隅に立つた。二三度聲をかけたが何の返事もない。土間に置いてある膞風呂や、炭俵や、糟味噌桶など、目が馴れるとだんだん見えて來る。編笠が一つ壁に懸つて居た。また、

「御免なさい。」

今度の聲は餘程大きいばかりか底力があつた。聲はひたりと閉ぢた四枚の煤け障子に眞直にぶつかつて、森閑と澱んだ土間の空氣を動搖させた。けれど内からは何の反響も來ない。障子を少し助けて見ると、眞黒な大きな洞窟のやうな、まるで、惡魔の秘密會議所のやうなものが目の前に開ける。ぢつと眼を据ゑて見てゐると廣い板間で、中央に大きな圍爐裏がきつてある梁や、天井なしの家根裏から、四壁まで丁度漆で塗つたやうに黒光りに光つて居るのであつた。自在には大藥罐が下つて居るが、「ぼや」は燃え盡して、一點の火氣もない。次の古莫蓙と、藁埃の浮く緣側の一部分とが見えながら人一人居さう

な氣色さへもない。と見ると大きな黒猫が隱險さうに忍び足で縁側を歩いて居る。

私は黒猫を一目見た時、心の一隅で何か深く思ひ當るところのあるるうな、一種の感動を覺えたけれど、それが何であるかどうしても分らない、屹度何かある、何かあるとばかり頻りに思はれた。

裏へ廻ると庭を横ぎつて、取付が仕事場である。三人の若者が縱の厚板を挽いて居る。木の香が心よい。四邊には鉋屑が山になり、鋸屑は霜のやうだ。水桶の傍の砥石から青色の水が流れて、地に煮染んで居る。

私の言葉に應じて若者の一人は、すぐ外に走つた今主人は池畔の小舍にでも行つてゐるのであらう。

私は今日から此山間の養鯉所にかうした素朴な人達と一つ圍爐裏に生活するのだと、胸を張つて、あたりを見廻しながら主人の來るを待つて居る。――未完――

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯後の雜感想

らいてう

◎本誌は第三號です。三はなぜか意味のある、重大な數のやうに思はれてなりません。第三號の如何はこの小兒の將來に大きな關係がありはしますまいか。かう考へて私は本號に對しますと、どうも心細い感しがしてならないのです。たとへ下手でも生命の凝つたやうな作品の一つなりとも毎號本誌によつて發表することが出來るやうに御互に骨を折りませう。そして一號は一號と進歩のあとの見えるやうにしたいものです。よい作品の來るのを毎日々々待つて居るのは編輯係のものばかりではありますまい。

◎生きて居るのか死んで居のか分らないやうな生温つこい、影のうすいものばかり見せ付けられてはお互に心苦しい次第です。ありあまる精力があつてのなぐさみならばまた格別なこと、無駄話をしやべつたり、書いたり、牛の涎の長々とよまひ言をたらすばかりが女のすべてゞもありますまい。

◎のらりくらりや、あそびは進化の最高級に達した者の生活、少くともさう云ふ者にのみ許されることです。今日の女にはまだ、まだ容易に許さるべきものではありますまい。

◎生命の流れは刻一刻に進化し今や世界の人類は漸く人間の境界を脱し、今日の人間以上のものに進化しやうと、意識的にせよ、無意識的にせよ日夜に血眼になつて努力してゐるてはありませんか。我々は昔の人が考へたやうな一定不變のものではありますまい。實に變化性に富んだ、日に日に新に、より美しく、より強く、より大きく、より秀れたものとなり、かくて無限に進化すべき前途を有つて居るものです。ひとり女のみ生物進化の理法に洩れて、まだ人間の仲間入

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りも出來ないと云ふやうな、そんな不公平な自然の法則はない筈です。私共の意志を以て進化の力を增進するばかりか、それを早めるやうに努力をせねばならないでせう。

◎今日の女は全く注意力の弱いものです。統一性の缺げたものです。やつと小兒の無意注意の狀態から、脫して有意注意の狀態に一歩踏み込んだ位のものでせう。まだ、まだ、まだ、まだ、今後長い長い間、この有意注意の階段にあつて飽く迄も主我的態度を續けねばなりません。徹頭徹尾、反抗的、否定的、克服的、奮鬪的の態度で死物狂に直進せねばなりません。そして彼方に聳える自我主張の項點、自覺の頂點である苦しい、苦しい峠をいかに弱くとも是非に越さねばなりません。

◎もとより私とてこれを私共女が行き付く最後の境地だとは決して思つて居ないのですが、今日の女が、—女と限らず人間たるものが一生涯に於て是非に一度は通過せねばならぬ關門である、この關門を通過しないことにはほんとのものになることが出來ないと考へるところから、今日の女に向つて說かるべき福音はまだ主我的系統のものでなければならぬと信ずるのです。

◎併し私はこの先きを豫想して居るものなので否、豫想ではない、自我主張の極に於て來る忘却の境地、かの嚮きの小兒の無意注意の狀態とよく其態度を同じうしてしかも全然違つてゐる受動的、無抵抗的の非主我的狀態、ここか矢張り我々の最後の落着き所であると信じて居るのです。この境地まで來て始めて我々は心身共に眞の自由を得、靈性は十二分に發揮せらるゝのではないでせうか。

◎併しこの最後の非主我的境地の福音が直に今日の日本の女に向つて說かれる時、何等の價値なきものとなるばかりか、却て惡魔の聲となり、自覺なき以前の受動的態度となり終りはせぬか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふことを恐れるのです。

◎私は今、ふと、こんな言葉を思出しました。「汝等は我が信仰者なり。されど總ての信仰者に何の價値ありや。汝等は未だ索めずして、已は我を見出てき。總ての信仰者の爲すところは此のこときなり。これ總ての信仰に價値の少き所以なり。」

◎私共はまだ、主我的態度を續けて、飽迄もこれを貫かねばならぬ。「其自からの燃燒よりして其自からの敵の來るを勝れりとすべし」

◎生命なきものが筆を甜り、甜り、墨汁もて書いたもの……ああ其中から洞々として聞ゆる空虛の響をどうしませう。

——十月二十日——

社員諸姉へ（編輯室より）

◎社員は毎號必ずこの欄の御一讀を願ひます。

◎本社員は總て本社の研究會で定めました問題に對しては眞面目な御自身の意見を本社に宛て御送り下さい。

◎十一月の問題としてイプセンの人形の家を批評することになりました。

◎嚮きのヘダガブラーの折の經驗から今度は皆さんに書いて頂くことにしました。（なほ贊助員其他の御婦人の御意見も伺ふ筈です。）

右原稿〆切、來月十三日

原稿は五枚以上無制限。

◎以下人形の家研究書目を列記して置きませう。

1. **G. Brandes,** Eminent Authors of the 19th Century.
2. —— ——— Ibsen and Björnson.
3. **Bernard Show,** Quintessence of Ibsenism.
4. —— ——— Dramatic opinions and essays.
5. **George Moore,** Impressons and Opinions.
6. **Merejkouski,** The Life-work of Ibsen.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

7. **James Huneker,** Iconoclasts.

8. **Phillip H. Wicksteed,** Four Lectures on Henrik Ibsen.

9. **Boysen,** Commentary on the Works of Henrik Ibsen.

10. **Henrik Yager,** Heurik Ibsen.

11. **Jeannette Lee,** Ibsen's Secret.

12. **Edmond, Goss,** Ibsen.

13. **Haldane Macfall,** Ibsen: The Man, his Art, and his Significance.

14. Csrreopoudence of Henrik Ibesen.

15. **Moses, H.** Ibsen; The Man and his Work.

16. **Emil Reick,** Henrik Ibses Dramen.

17. **Les Berg,** Henrik Ibsen.

18. Berthold Litzmann, Ibsens Dramen.

19. **Schmitt,** Ibsen als Prophet.

20. **Rudolf Lothar,** Henrik Ibsen.

21. **Paul, Erust,** Henrik Ibsen.

22. **Otho Brahm,** Ibsen.

23. **Passorge,** Ibsen.

24. **Lou undreas Salome,** Ibsens Frauen gestalten.

25. **Hermann Bahr,** Ibsen.

26. **Hanstein,** Ibsen als Idealist.

1、島村抱月譯「人形の家」(早稲田文學四十三年一月掲載)

2、高安月郊著イプセン社會劇。

3、桑木博士、イプセンのノラに就きて(丁酉倫理三十八年七月號掲載)

4、坪内博士近世劇に見えたる新しき女(早稲田講演五、六、七號連載)

5、島村抱月著、近代文藝研究。

6、長谷川天渓著、自然主義。

7、島村抱月譯「ノラ」(結末の場)(早稲田文學三十九年十一月掲載)

8、島村柳水、個人としてのイプセン、(早稲田文學四十三年七月掲載)

9、島村柳水、イプセン遺稿より見たる人形の家(早稲田文學四十四年九月號掲載)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

10、相馬御風、ノラと云ふ女(讀賣新聞本年八月十三日)
11、相馬御風、さめたる者の行方。
12、劇と詩、(本年九月號)
其他、

◎批評は分類してなるべく精細に御書き下さい。あながち左の分け方によらずとも、各自獨特のものを示されゝばこの上ないことですが、社員の中の年若き方への參考にもと記したに過ぎません。無用の老婆心と怒れば却て幸です。

1 無自覺のノラ、
2 自覺するに至る迄の經路、
3 自覺せしノラ、
4 ノラの將來如何(人形の家に現はれてゐる處まで即ち獨立宣言までのノラはほんの婦人問題の發足點で、今日私共婦人の上にふりかゝつてゐる多くの問題は寧ろ所謂人形の家を出てから後のノラ自覺以後のノにあるかと思ひますからこの項は是非ありたいものです。)
5 全體に亘つての感想。 以上。

◎研究會で毎月何回か講師をお頼みして講義をうかゞふことも一方でいたしたいと思ひます。目下交渉中ですから其内よい御通知をいたすことが出來やうと思つてたのしんで居ます。

◎研究會ならびに「青鞜」に對する御希望や御要求は御遠慮なく本社宛に御申越下さい。研究會に就いては成るべく早く御申越いたゞけ御れば結構です。

◎毎土曜日を面會日といたして御座いますから、社員の方々は本社に御出下さい、色々御話をいたしませう。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎をも鞏固にする必要が御座いますから多少に拘らず基本金の中に有志諸姉の御寄附をお願ひ致したいと存じます。

◎社員の方は毎月社費三十錢を其の月の十五日迄に御忘れなく本社に御納め下さい。

◎社員の方々の原稿は隨時青鞜社宛に御送り下さい。

◎本社の賛助員國木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて毎月一六の夜に松月古流生花投入花、及千家敎流元藤庵打瀨翁補助の下に御指圖せられて居ります。なほ日中は三越呉服店の方に御出勤のさうです。

◎賛助員加藤籌子氏の御作御多忙の爲本號に掲載することの出來なかつたのは誠に殘念なことでした。

◎木内氏の夕化粧は數年前の作で掲載することは作者の本意ではなかつたのです。

本號責任者
保持研
平塚明

青鞜第四號(ノラ附錄)豫告

題未定(小說)　加藤籌子
一　夜(小說)　物集和子
六兵工燒(小說)　阿久根俊子
俳　句　白　雨
黑　猫(飜譯)　ポ　オ
高原の秋二　らいてう

附　錄

人形の家合評　青鞜社一同

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本郷區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員贊助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に贊同したる女流文學者將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす本社の目的に贊同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす

第六條　本社の目的を遂する爲め左の事業をなす

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び贊助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし

二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと但し贊助員の出席隨意たるべし

三、毎年一回大會を開くこと大會には贊助員客員を招待し講話を請ふことあるべし

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、贊助員、客員への雜誌青鞜寄贈費

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、賛助員、客員其他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

名　簿（いろは順）

賛助員

長谷川時雨　岡田八千代
加藤籌子　與謝野晶子
國木田治子　小金井喜美子
森しげ子

社員

岩田百合子　井上民子
岩野清子　戸澤はつ子
茅野雅子　尾島菊子
大村かよ子　大竹雅子
加藤みどり　神崎恒子
田原祐子　田村俊子
龍野ともえ　上田君子
上田朝子　上野葉子
柳清美　山本龍子
松井百合子　小林哥津子
阿久根俊子　荒木郁子
佐久間時子　水野仙子
杉本正生　鈴木かほる

係員

中野初子　保持研子
平塚明子　木内錠子
物集和子

豫告

青鞜社同人譯

ポオ散文詩集

青鞜社出版

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寄贈書目

層雲(一ノ六)	層雲社
女の卷(句集)	磯ヶ谷紫紅
婦人の鏡(九月號)	東京社
大橋圖書館第九年報	大橋圖書館
車前草(一ノ二)	車前草社
矢車(十月號)	矢車發行所
春夏秋冬(十月號)	籾山書店發行
婦人文藝(第一)	婦人文藝社
日本雜誌(十月號)	日本雜誌社
女子文壇(十月號)	女子文壇社
旅行(一ノ二)	旅行社
俳味(二ノ十)	俳味社
心の花(十月號)	竹柏會
スバル(十月號)	昴發行所
一人一黨(第一)	一人一黨社
十善寶窟	目白僧園
三越週報	三越呉服店
蝸牛(十月號)	蝸牛社
試作	試作社

村井弦齋著 增補註釋 食道樂 全一冊 春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷(合本) 定價金二圓 郵稅金十八錢

村井弦齋著 增補註釋 食道樂 縮刷 春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷 全四冊 各卷定價八十錢 郵稅十二錢

村井弦齋著 增補訂正 臺所重寳記 全一冊 定價金一圓 郵稅金十二錢

赤堀松吉 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 洋食五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵稅金十二錢

赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 惣菜五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵稅金十二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 年中惣菜 全一冊 定價金八十錢 郵稅金十二錢

故久保田米僊著 毎日の惣菜案內 全一冊 定價金十錢 郵稅金二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 茶の湯の心得 附茶席料理 全一冊 定價金八十錢 郵稅金六錢

赤堀吉松閲 奥村繁次郎著 名物 諸國料理 全一冊 定價金四十錢 郵稅金六錢

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

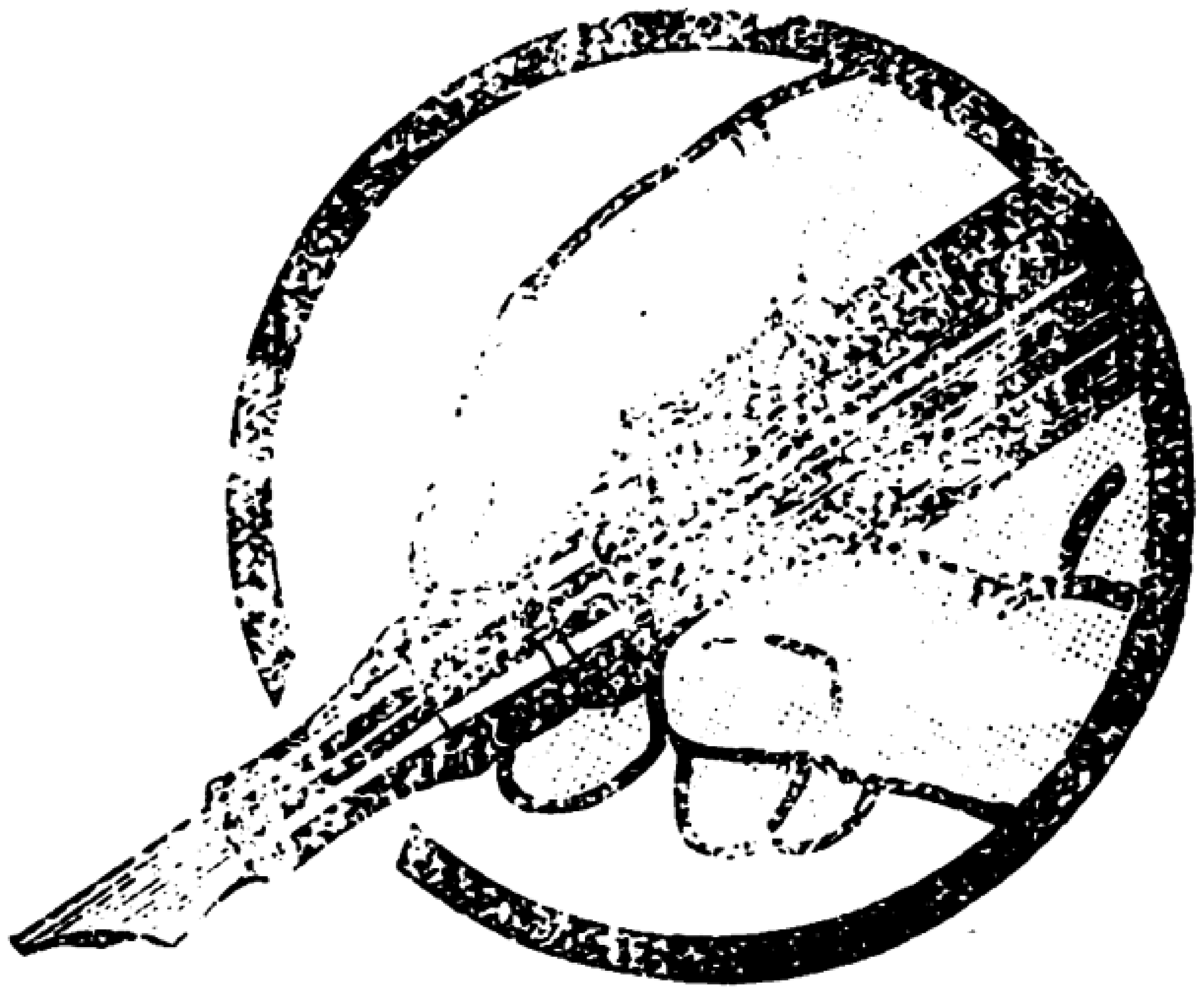
時勢の趣向と機運を察するに敏なる女流の持たせ給ふべきオノト萬年筆とオリオン萬年筆

萬年筆

オノトは理想的オリオンは實用的倶にインキ留の裝置あり體裁高雅筆尖流滑使用は永久也

オノト萬年筆

飾無きものは金六圓以上
飾有るものは金七圓以上



オリオン萬年筆

十四金ペン装付
金貳圓八拾錢

目錄郵呈

東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

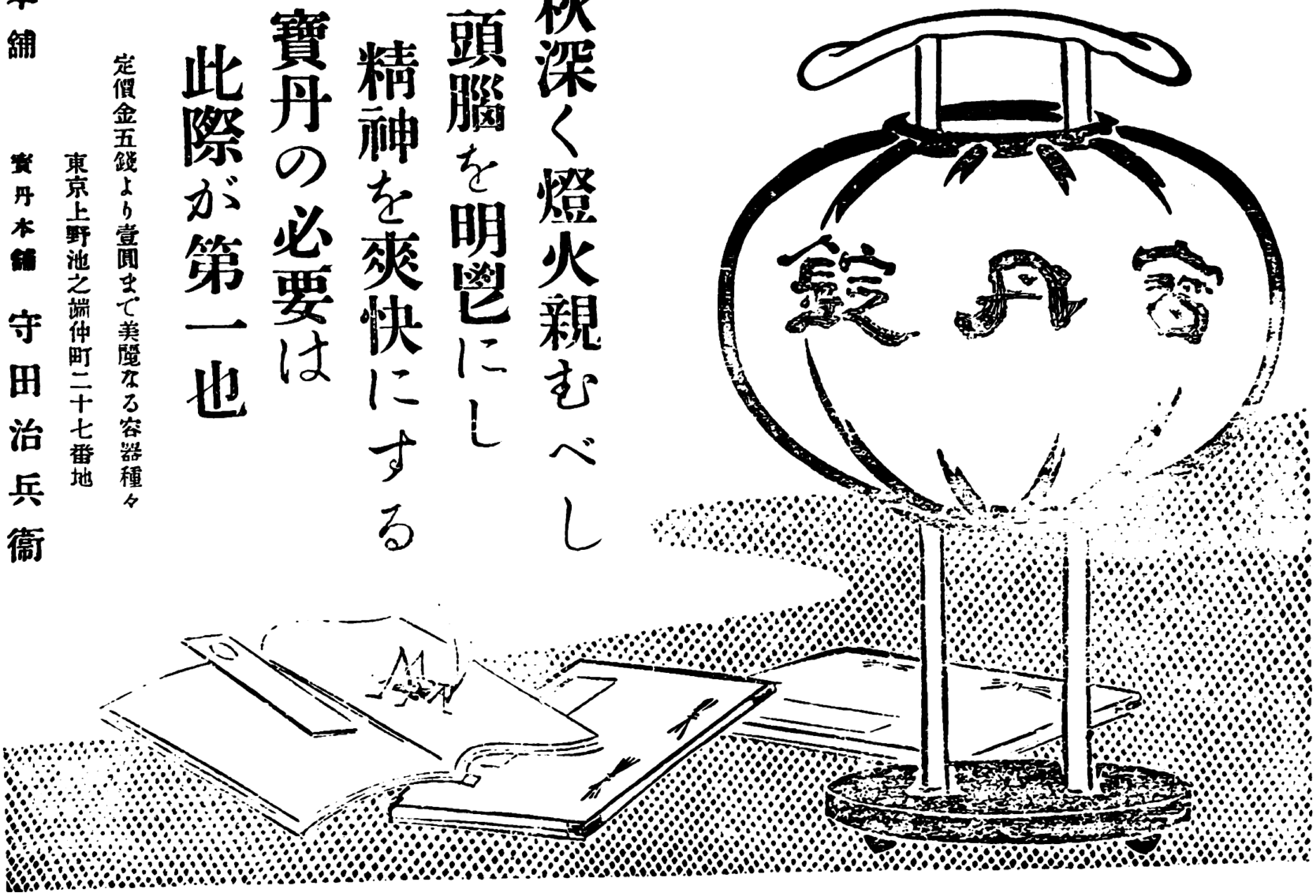
秋深く燈火親むべし
頭腦を明晳にし
精神を爽快にする
寳丹の必要は
此際が第一也

定價金五錢より壹圓まで美麗なる容器種々

東京上野池之端仲町二十七番地

本舖

寳丹本舖　守田治兵衞



最良髮油

みやけ油

登録商標

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇振替口座八七五一番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十七號（十一月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊同二圓八十錢

新無線電話（故團藏の事）……室田武里
試演劇場と「人形の家」……川村花菱
第一回文藝協會試演……芹影女
ノラの性格……高安月郊
ノラの解釋に就いて……島村抱月
關白秀次に就いて……井出蕉雨
市村座所見……林和生
「姉と妹」の作意と效果……佐藤紅緑
「結婚反對俱樂部」餘談……松居松葉
拙作「鎌倉武士」……右田寅彦
戯曲 手袋（ビヨルンソン作）……鷗外博士譯
市村座藝談（菊五郎、三津五郎、吉右衛門）……
明治座訪問記（仁左衛門、源之助）……
「箕輪心中」の第三幕……林和生
「道成寺」の話……關根默庵
五代目歌右衛門の懷舊談……伊坂梅雪
十月の脚本……花菱生
笹つ葉物語……雀百嘯
短篇小說の材料と一幕物……川村花菱
劇談會——劇壇時事——劇界一覧……
脚本 夜行軍……紫魂生

本郷區湯島切通坂町萬報社內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八六
振替口座一八〇三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

顔見世や矢倉におこる霜の聲　凡董

俳味

十一月號要目

失生は馬…………（卷頭語）

近松の俳句…………水谷不倒

俳諧昔噺…………內藤鳴雪

銕沾と沾圃…………吉丸萬太刀庵

怒濤庵俳諧…………江見水蔭

俳諧七部集總論（第一章）　風雷子

澤露川の墓誌…………天野眞名井

素人の見たる俳人…………寺澤陽風

募集句評…………不磁子

秋晴…………（懸賞俳句發表）

我が見たる俳畫…………（懸賞文章發表）

其他俳句満載

疑ひの淋しさ…………相馬犬蓼

觀劇十七字…………田中塵外

町屋まで…………沼波瓊音

注意人物…………豐原左堂

新聞社の俳味…………小倉鶴峯

俳諧の儀式…………春秋庵準一

通り雲…………レモン法師

口繪（晢）…………（八代目團十郎筆）

挿畫…………小杉未醒

附錄

手向發句集…………義仲寺

毎月一日一回發行

定價

一部　金拾貳錢

郵稅　壹錢

半年分前金　郵稅共　金六拾八錢

一年分前金　郵稅共　金壹圓參拾貳錢

發行所

東京市本郷西片町拾番地

俳味社

振替口座　東京參四參四番

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十五卷　十一月號　第十一號

霧の音　佐佐木信綱
續々近畿百首　川田順
天津旗雲　三浦守治
風の日　片山廣子
九月の旅（小說）　長谷川時雨
沈默（トフオオテ）　吹田蘆風
わかいこゝろ（小說）　岡部千代子
若き聲　青木正
神嘗祭の朝　印東昌綱
鹽原の芝居　荻原濱子
刀水河畔　石榑千亦

定價一部十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢●

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

第七年十四號
一日發行

十一月號

定價一冊金拾五錢送料壹錢五厘

◉女性の獨身難……大阪高等商學教授 田中祐吉

◉平安朝時代の宮廷婦人……眞山青果

▲裾野日記……佐野天聲

▲大和路の秋……澤村文學士

戀愛論

◎沒我の愛情なき者は玉の盃底なきが如し……建部文學博士

◎人生に於ける戀愛の價値如何 早稲田大學講師 金子筑水

◎戀愛と云ふ言語の扱ひ方……遠藤文學博士

◎戀愛と結婚と……生田文學士

◎天下晴れて說くべき問題ではない……下田文學士

◎文壇の影響を受けたる戀愛は崇高なり……田村俊子

●私の貞操觀（二）……與謝野晶子

◎草を敷きて……山田邦子

◎山より山へ……平塚白百合

◎晩秋の牧場……百合香

◎今様羽衣……紫生法師

◎別れた人へ……野英

◎新しい作家……白光

◎夜寒語……坂東太郎

◎落葉焚く日……女護島守

▼公設繪畫展覽會を觀る……岡本一平

◎名流婦人の愛讀書（其一）三宅花圃女史……

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版 （振替口座東京第壹七貳九番）

● 賣捌所全國各地書肆に販賣致す●若品切の時は出版元へ御申込を乞ふ ●

新刊

小山内薰氏著（發賣）

演劇新聲

新興演劇に對する者諸演劇論數十篇を集む

定價金八拾錢 送費六錢

北原白秋氏著（再版）

詩集 邪宗門

初版湮滅して久しく江湖渇望に背きたりし大詩集の再版出づ

定價八十五錢 送費金八錢

文藝雜誌

朱欒

十一月一日發行

特價金四十五錢

ザンボア創刊特別號

夜（戯曲） 木下杢太郎

司祭と女（對話） 長田幹彦

肺ペスト（小說） 柴田流星

題未定（小說） 谷崎潤一郎

少年と死（小說） 小川未明

死（小說） 和辻哲郎

挿話（小說） 久保田萬太郎

芝居小景（小品） 永井荷風

海の思想誘惑（小品） 蒲原有明

尺牘數則（通信） 長田秀雄

小品一篇 片上天弦

南國小品 北原白秋

批評（評論） 高村光太郎

デタラメ日記（評論） 齋藤與里

モンマルトルより（通信） 石井柏亭

田端にて（評論） 山本鼎

批評 正宗得三郎

文學界の追想 太田水穗

椎の葉（詩） きしのあかしや

水仙外二篇（詩） 長田秀雄

不可能（詩） 上田敏

惱める風景（詩） 三木露風

蚊捕り外二篇（詩） 北原白秋

秋の女（歌） 吉井勇

歌十二首 若山牧水

其他 高村光太郎 山崎春雄

繪畫 山本鼎 齋藤與里

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番） 東雲堂

十一月一日發行

スバル

價廿五錢
郵稅二錢

十一月號

澪（小說）　長田幹彦
花火（小說）　久保田萬太郎
雁（小說）　鷗外
飾同屋（小說）　長島豊太郎
山の燒けたる日の夕がた（脚本）　堀花村
評論（詩）　瀨川菊三
むく鳥通信　無名氏
雨ふる街の晩秋　山本禿坪
詩數篇
高村光太郎
堀口大學
歌
三ケ島よし子
原田琴子
段谷秋洋
歌
萬造寺齊
吉井勇
阿部省三
堀口大學
[illegible]
スバル同人

東京神田北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「藝文」特別號

詩人クライスト

十一月十五日發行▲定價四拾錢郵税二錢

獨逸文學に於けるクライスの位置　文學博士　藤代禎輔
クライストの戯曲　文學士　橋本忠夫
クライストの小説　文學士　小牧健夫
クライストとロマンチック　文學士　平田元吉
クライストの女性　文學士　福井利吉郎
クライスト評傳　文學士　成瀬清
愛國詩人クライスト　文學士　大塚治雲
クライストの筆致　文學士　廣木多三
喜劇「破壺」　辻善定
小説「ミヒアエル、コールハース」　榎木安三郎
附録一、クライスト著作目録
附録二、クライスト研究書目
口絵　一、クライスト肖像
二、ホルヘルミー子とエンマ、ユリアーチ
三、「ケルマニヤ、アン、イーレ、キンデル」の末句

發行所　東京小石川原町六　振替口座一三五三三　鷄聲堂

文豪國木田獨歩

獨歩書簡

の書簡數百通を集む以て文豪の眞生活を知る可く以て生ける書簡文範として學ぶ可し！

▼四六横型美本
▼小杉未醒氏裝
▼定價金六拾錢
▼郵送料金八錢

五版又々賣切

第六版

印刷出來

批評一班

▲二六新聞曰く、其全部を通じて精神的な眞面目な熱力に充ちた調子は深く人を動す就中其戀人に送つた手紙には獨歩氏の眞情流露して再讀三讀するに足るものがある書翰集として此位人を引き着ける者は少なからう。

▲讀賣新聞曰く、獨歩が高潮の極に達したのは明治二十八年佐々城信子との戀愛時代であつた。私は今迄にかくの如く熱烈の戀愛萬能主義の文字を見た事がない。二人の愛を成功するのは人道の爲めだとまで叫んで居る。如何なる困難があらうとも二人の愛さへ變らなければ、それで滿足な生活が出來るものと眞に思つて居たらしい。

▲日本新聞曰く、殊に彼が生命を賭して戀へる佐々木某女に寄せたる數十通の書簡に至りては痛絕人を泣かしむるものあり。

▲大阪新報曰く、殊に獨歩が相愛の人信子に與へた書簡の數々は、一言一句皆熱血である、熱涙である、「嗚呼わが信子よ。吾等一體は悲壯の歌を口吟して人情の大道を歩まんとするのみ」と云ふが如きは眞に一篇の哀詩である。裝釘も美しく、體裁も氣が利いてゐる。

發行所　東京市麹町區飯田町　振替東京一七四二番　新潮社

●入會許婉の便宜を圖り 更に二千名迄入會金免除●

女子大學家政講義

●新學期開講

十月發行の講義録は既に全國の家庭婦人界に提供好評嘖々たり

學科目及講師

○修養談 ○修身講話 ○教育 ○實驗心理學 ○兒童研究 ○法制大意 ○經濟大意 ○社會衛生 ○家庭理科 ○家事

諸名士教育大家
成瀬仁藏
麻生正藏
文學博士 松本亦太郎
高島平三郎
法學博士 奥田義人
文學士 中隈敬三
醫學博士 三宅秀
近藤耕藏
井上秀子

○作文 ○日本料理 ○西洋料理 ○裁縫手藝 ○挿花 ○家庭園藝 ○自然研究 ○文藝 ○美文評釋 ○其他科外として女子と演劇、歌劇、結婚問題
家庭衞生顧問欄臨時有益なる講演を掲載す

小笠原清務
笹木幸子
手塚かね子
櫻楓會研究部
兒島晩翠
農學士 佐々木祐太郎
大橋ひろ子
文學士 武島羽衣
文學士 下村莢

（毎月二回發行 會費一ヶ月金五十錢）

發行所 精美堂（電話番町九三二）
東京市小石川區久堅町一〇八

會員募集

■會則付き 內容見本 申越次第送呈

東京小石川高田目白臺
日本女子大學校通信教育會

入會の最好機

普通科　高等科

女子手藝講義錄

本會の講義錄は現代婦女界に廣大の信用あり

本會の講師は東都に於ける有名なる各學校の教師と都下に於て著名の各専門家とに依り成立せるものなり

講義（普通科）

△裁縫科和服洋服　△手藝用圖畫科　△割烹科和洋　△手藝教授法　△組糸科　△袋物科

△編物科　△刺繡科　△造花科　△果實科　△細工物

會費（普通科）

壹ケ月分……金參拾錢

半ケ年分（割引）金壹圓七拾錢

壹ケ年分（割引）金參圓廿四錢

△摘細工

課目（高等科）

△裁縫科和服洋服　△手藝用圖畫科　△割烹科和洋　△手藝教授法　△組糸科　△袋物科　△結綳科

△編物科　△刺繡科　△造花科　△果實科　△摘工科

會費（高等科）

壹ケ月分……金參拾五錢

半ケ年分（割引）金壹圓九拾九錢

壹ケ年分（割引）金參圓七拾八錢

△課外講義數種

成功の捷徑は即刻入會するにあり

▲入會規定及内容見本申越あれば無料進呈▼

學科壹ケ年修了

毎月一回　發行一日

入會申込所　東京日本橋角　大倉書店

振替貯金口座東京二三八番

入會申込支部　全國各書店

雜誌規定

●毎月一回一日發行
●定價一册金貳拾五錢 —郵税壹錢五厘—
●原稿〆切期日は毎月十日限とす。
●前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢
（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
●廣告料 （一頁）拾五圓 （半頁）八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
●振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
●郵券代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと）

明治四十四年十月二十五日印刷
明治四十四年十一月一日發行

東京本郷區駒込林町九番地
青鞜社内
編輯兼發行人 中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍

禁轉載

發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社
（電話下谷三七七六
振替東京口座壹壹六〇番）

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂
電話本局二一四
二三二八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第二號
明治四十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可